令和元年度西医体で優勝の栄冠に輝いたヨット部の緊迫したレース。31108が本学。
（関連記事26ページ）

讃樹會

令和２年２月１日発行

発行　香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX　087-840-2291
E-mail　dousou@med.kagawa-u.ac.jp
https://dousoukai.site/sanjukai/
発行人　佐藤　清人
編集人　谷　　丈二
印刷所　㈱美巧社

CONTENTS

02　第16回定期総会開催のご案内
03　会長選挙及び理事選挙のお知らせ
04　会長立候補所信表明
06　就任挨拶
07　ニュースの窓
11　理事会議事録
12　研究助成金／研究奨励金　受賞の言葉
14　【寄稿】小森秀雲先生の書道教室
16　【開業医だより】
18　女性医師特集 in 香川
24　【特集】学生の活躍がすごい！
32　追悼
37　関連病院紹介／高松赤十字病院
40　国外留学助成金　留学レポート
42　趣味ざんまい　It's time to fly
44　創部ものがたり／映画研究会
46　学生支援（競争的資金）活動報告
50　支部会・懇親会
62　第40回香川大学医学祭を終えて
64　編集後記／事務局からのお知らせ

香川大学医学部医学科同窓会讃樹會

第16回定期総会開催のご案内

日　時　：　令和２年５月９日（土）15時30分より

場　所　：　香川大学医学部　臨床講義棟１階

本年は、２年に一度の総会の開催並びに会長の任期満了にともなう会長選挙を執り行います。香川大学医学部医学科同窓会として更なる展開、飛躍を目指し、たくさんの方のご意見をいただきたいと思います。ご多忙中とは存じますが、会員の皆様お誘い合わせの上、多数ご出席いただきますようお願い申し上げます。

やむを得ず欠席される正会員の方は、同封の委任状をご送付頂きますようお願い申し上げます。委任状を含め、正会員の十分の一以上の参加をもって、総会が成立いたしますので、ご協力宜しくお願いします。

尚、委任状の返信が無い場合は、議長に一任したものとみなしますのでご了承ください。

また、特別会員、賛助会員、名誉会員、準会員の方には投票権並びに総会での議決権がございませんので、あらかじめご容赦下さい。

タイムスケジュール		
14：30～15：30	会長選挙公開開票	臨床講義棟１階
15：30～16：10	定期総会	臨床講義棟１階
	議題　①平成30年度・令和元年度事業報告 ②令和元年度決算報告 ③令和２年度予算案 ④理事会からの審議項目	
16：30～17：30	総会記念講演会 講師　香川県知事 浜田恵造氏	臨床講義棟２階
	演題「人口減少問題克服・地域活力向上に向けた取組みについて ～本県の医療政策の動向を中心に～」	
18：30～20：30	懇親会	JRホテルクレメント高松「玉藻」
	会費　10,000円	

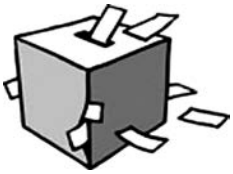
◎ 出欠返信並びに投票の締切について ◎

総会・懇親会の出欠は、同封のハガキ、Eメール、電話、FAX等で、**３月末日までに**返信下さい。

選挙の投票締切は、返信用封筒で**５月７日（木）17：00到着分まで**です。

出し忘れのないように、３月末日までに両方返信することをお薦めします。

お間違えないようにお願いします。



令和２年度・３年度
会長選挙及び理事選挙のお知らせ

会長選挙

同窓会報58号（令和元年９月号）にて告示致しました会長選挙につきまして、立候補者が平川栄一郎氏のみとなりましたので信任投票を行います。立候補の所信表明及び推薦状はP４、P５をご確認下さい。投票用紙の**信任・不信任のいずれかを○で囲み**、同窓会事務局まで郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。
（５月７日午後５時必着）
総会当日に選挙管理委員会が公開で開票し集計いたします。（５月９日14：30～15：30）
投票は締め切り厳守でお願いします。

理事選挙

同様に会報にて告示致しました理事選挙につき、会員のみなさまから次年度理事を卒年単位でご推薦いただきました。上位に推薦されました会員が次年度の理事候補者となっていますので（同封の理事選挙用紙をご確認下さい）、信任投票をお願い致します。
理事選挙の信任投票につきましては、
信任の場合は記入せず、不信任の場合のみ「×」を記入下さい。
こちらも同様に、同窓会事務局まで郵送または直接お届けいただきますようお願い致します。
（５月７日午後５時必着）

選挙管理委員会委員長　植村信久

《《 投票方法について 》》

① **会長選挙投票用紙**（ピンク）**に記名投票**したものを小茶封筒に入れ厳封する。
② **理事選挙用紙に記名し、不信任の場合だけ「×」を記入する。**
③ **委任状に記名**する。（総会出席、もしくは議長に一任の場合は委任状の提出は不要です。）
④ ①～③を返信用封筒で返信下さい。

投票の返信締切：
５月７日（木）午後５時到着分まで有効

総会及び懇親会の出欠返信締切は３月末日です。
選挙の投票締切とは別ですのでお間違えないようにお願いします。

讃樹會会長立候補所信表明

平川栄一郎（昭和61年卒・1期生）

讃樹會会員の皆さまにおかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、母校のためにご尽力をいただきました佐藤清人会長が小豆島中央病院企業団企業長としての職務がお忙しく会長職を退かれるとのことで、讃樹會名誉会長である濱本龍七郎先生及び大西宏明理事長等の多くの先生方からのご推薦を受け、会長選挙に立候補いたしますので所信を表明させていただきます。

医療を取り巻く状況は、少子高齢化の進行に伴い地域包括ケア、在宅医療の推進、地域医療構想による医療提供体制の見直しなどにより大きく変化しています。また、一方では国の働き方改革による医師の勤務環境や地域における医師数の偏在、分野別による偏在が問題となり、地方においては必要医師数の確保が喫緊の課題となっています。医療機関の地域における機能と役割の明確化がより一層必要となり、大学の持つ役割や医療の在り方が大きく変化しています。そのような中で、讃樹會は全国で活躍する同窓生のために共に歩み、大学医学部、医療行政、地元行政との連携をとりながら、時代の流れに迅速に対応できる同窓会を目指します。

同窓会はこれまで大学運営への協力、卒後研修センターへの協力、国際交流への協力、同窓生への学術助成や留学助成、支部会・同期会への助成などの多くの事業活動に取り組んでまいりました。これらの活動を継承、発展させるのは勿論のこと、その上で同窓会の見える化を進め同窓会運営体制の見直しを行ってまいります。現在、同窓会の一般社団法人化への検討を行っておりますが、法人化には利害得失があります。そのため、法人化への移行には引き続き慎重で十分な検討が必要であり、今後必要性が生じた際には迅速に法人化への対応ができるよう準備を整えてまいります。また、同窓会は先述の医療を取り巻く環境変化、時代の流れに迅速に対応していく必要がございます。関連部会の設立やさらなる情報交換の場をつくり、母校医学部及び同窓生の支援、地域貢献につなげていきます。例えば、①母校医学部が従来、力を入れております国際交流に対して、同窓会内に国際交流部会を立上げ、今後の医学部の発展に繋げていきます。②開業医部会の設立により地域医療と医学部や医療行政との連携強化に寄与し、地域貢献に繋げます。③昨今の女性の職業生活における活躍の推進に鑑み、同窓会は女性医師の活躍を支援します。④これまでも全国の同窓生のために支部会の充実を図ってまいりましたが、会員相互のネットワークづくりと同窓生の住所把握率の向上に努めてまいりたいと考えております。

このような、時代に迅速に対応できる同窓会を実現していくためには、皆さま方のお力が必要不可欠と思っております。執行部、理事会、そして讃樹會会員の皆さま方のご指導を賜りながら、同窓生のための身近で頼れる開かれた同窓会となるように尽力していく所存です。

推 薦 状

令和２年度・３年度香川大学医学部医学科同窓会讃樹會会長に

１期生　平川栄一郎　君を推薦します。

推薦人

（ 1 ）期生、（1986）年卒　濱本龍七郎
（ 1 ）期生、（1986）年卒　舛形　尚
（ 1 ）期生、（1986）年卒　出口一弘
（ 1 ）期生、（1986）年卒　大西宏明
（ 3 ）期生、（1988）年卒　杉元敏史
（ 5 ）期生、（1990）年卒　西山佳宏
（ 5 ）期生、（1990）年卒　正木勉
（ 5 ）期生、（1990）年卒　星川広史
（ 5 ）期生、（1990）年卒　羽場利次
（ 5 ）期生、（1990）年卒　村尾孝次
（ 6 ）期生、（1991）年卒　三木宗統
（ 6 ）期生、（1991）年卒　日下隆
（院）期生、（1991）年卒　三宅実
（ 7 ）期生、（1992）年卒　木下博之
（ 8 ）期生、（1993）年卒　金西賢治
（ 8 ）期生、（1993）年卒　西山成
（ 10 ）期生、（1995）年卒　星川洋一
（ 10 ）期生、（1995）年卒　中村文洋
（ 11 ）期生、（1996）年卒　横井英人
（ 13 ）期生、（1998）年卒　松田陽子

就任挨拶

病院長就任挨拶

香川大学医学部附属病院長
田宮　隆

「讃樹會」会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび2019年10月１日より病院長に就任することになり、一言ご挨拶を申し上げます。

私は1981年に岡山大学医学部を卒業し、同年岡山大学脳神経外科学教室に入局、2003年４月から、香川医科大学脳神経外科（現香川大学）に異動し、2007年７月から脳神経外科講座教授に就任し10年以上が経過しましたが、このたび附属病院のために尽くす機会が与えられたことを光栄に存じております。

現在、病院再開発は、正面玄関の道路と仮設外来で使用していた病院中庭の整備を残すのみとなり、今年３月にはすべて終了する予定でございます。長い間ご迷惑をおかけしましたが、新しい香川大学医学部附属病院として活動していく予定です。この活動を支えて戴く副病院長は、白神豪太郎先生（企画・診療担当、医療安全管理責任者）、横井英人先生（教育・研究担当）、星川広史先生（経営・評価担当）、南野哲男先生（病院再開発・広報担当）、冨山清江看護部長（医療の質管理担当）、中島一浩事務部長（副医学部長）です。執行部一同一致団結して活動していきたいと思っています。

まず、当院の基本理念「患者さんの権利を尊重し、良質・安全な医療を提供するとともに、医学の教育・研究を推進し、医療の発展に寄与する」に沿った診療を行って参ります。昨年実診療での倫理問題に対応するための臨床倫理委員会を設置し、今年も「患者安全」の考えに基づいた診療を充実させたいと考えています。医療環境については病院再開発が終了し、救命救急センター、ICU（集中治療室）を含め病棟部門は刷新あるいは改修され、中央診療棟も全面改修されました。このような最新の医療環境のもとで、良質・安全な医療を提供していく所存です。

次に、今後の課題ですが、昨年９月に当院は「がんゲノム医療拠点病院」の指定を受けました。四国では当院と四国がんセンター（愛媛県）の２施設が指定され、がん医療の発展に貢献していく予定です。これに伴い、がんゲノムに係わる検体検査の品質や精度管理のため臨床検査部、病理検査部におけるISO15189認定取得が必須となりました。その他、臓器組織提供・移植医療支援室による臓器移植医療への貢献、医療法改正に基づく放射線被曝の線量管理と記録の義務化に対する対応に加え、医療被曝低減施設認定も受ける予定です。

また、人生100年時代に突入し地域包括ケアが注目されており、医療だけでなく保健、福祉、社会の連携システムが重要であります。当院としても高度急性期機能を担い、高難度医療、先進医療、臨床研究、人材育成などを行い、かつ地域の医療機関とも密接な連携を構築する必要があります。さぬき市民病院との周産期医療連携（セミオープン）システムも開始され、K-MIX＋を用いた医療情報連携、薬局との情報共有や多施設臨床研究などへの応用、総合地域医療連携センター、病院訪問関係医療機関懇談会、ホットライン、イキイキさぬき健康塾、出前講義（デクリコン）などもさらに充実させる予定です。

小豆島中央病院の人材支援に関して、筧学長より小豆島地区は持続可能な地方分散地区であり、香川大学からも多くのプロジェクトを行っており、附属病院のミッションとして小豆島医療の将来像を構築していかなければならないとのメッセージが届きました。附属病院として大きな責任があり、「讃樹會」会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

さらに、チーム医療の推進のため「特定行為に係わる看護師研修制度」を当院も今年度から外科術後管理領域、術中麻酔管理領域、在宅・慢性期領域の３部門を申請しました。今後研修を終了した看護師による医師業務のサポートが可能となります。

また、病院スタッフの方々が最良の環境で仕事を行えるような設備、環境や処遇も重要であります。「働き方改革」の中、WGを設置し各部署と十分合議し、36協定の見直し、時間外の考え方ガイドラインの設定、事務職員の勤怠システム導入等行っておりますが、今後多くの課題が待ち受けています。今後も、職員が明るく笑顔で満足して働ける職場作りに務めたいと思っています。

上記のことを実践するためには、さらなる安定した病院経営が必須であります。すべての皆様のご意見を聞きながら、病院運営に反映させていきたいと思っています。皆様の益々のご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

「No man alone（決して一人では成し遂げられない）」、脳神経外科医Penfield先生の言葉ですが、皆様の協力があれば、きっと魅力のある素晴らしい香川大学医学部附属病院に発展すると信じています。今後とも「讃樹會」会員の皆様の一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

ニュースの窓

組織・人事

2019年10月１日付のご就任をお知らせします。

医学部執行部　（敬称略）

役職	氏名	所属
医学部長	上田夏生	医学系研究科長　生化学教授
副医学部長（医学科教育担当）	荒木伸一	医学科長　組織細胞生物学教授
副医学部長（看護学科教育研究担当）	市原多香子	看護学科長　急性期成人看護学教授
副医学部長（臨床心理学科教育研究担当）	黒滝直弘	臨床心理学科長　精神医学教授
副医学部長（大学院教育及び研究担当）	日下　隆（６期生）	小児科学教授
副医学部長（入学試験担当）	三木崇範（６期生）	神経機能形態学教授
副医学部長（評価・広報・社会連携担当）	平野勝也	自律機能生理学教授
副医学部長（総務担当）	中島一浩	事務部長

医学部附属病院執行部

役職	氏名	所属
病院長	田宮　隆	脳神経外科学教授
副病院長（企画・診療担当）	白神豪太郎	麻酔学教授
副病院長（教育・研究担当）	横井英人（11期生）	医療情報部教授
副病院長（経営・評価担当）	星川広史（５期生）	耳鼻咽喉科学教授
副病院長（病院再開発・広報担当）	南野哲男	循環器・腎臓・脳卒中内科学教授
副病院長（医療の質管理担当）	冨山清江	看護部長

第10回讃樹會市民公開講座　開催報告　2019年11月16日（土）16:00～17:00

恒例となった讃樹會市民公開講座が、11月16日土曜日、サンポート高松で開催され、今年も定員100名の会場が一杯になる盛況ぶりでした。市民のみなさんの関心の高い健康課題や最新の医療情報について、正しい知識を広く周知啓発することを目的に、香川大学の協力のもと毎年開催しているもので、今年で記念すべき第10回目の開催となりました。

開会に先立ち、佐藤清人会長（４期生）から、日進月歩の医療の中でも、がんの分野は遺伝子レベルでの新たな診断や治療法が次々と開発されるなど、近年急速に進歩していることから、今回香川大学の辻先生に「がん治療の夜明け－ゲノム医療とくすり－」と題してお話しいただくこととしたとのご挨拶がありました。

受付風景

引き続き、濱本龍七郎名誉会長（１期生）が座長となり、講師である香川大学医学部臨床腫瘍学講座教授辻晃仁先生のご略歴と演題、辻先生の御尽力により、

ご講演中の辻　晃仁先生

本年９月、香川大学医学部附属病院が「がんゲノム医療拠点病院」に指定されたことなどが紹介されました。

講演では、がんはわが国の死因の第１位であり、高齢化に伴い患者数は増加しているものの、診断・治療の進歩によって年齢調整死亡率は大きく減少していること、まずは予防としての生活習慣の改善やがん検診による早期発見が重要であること、がんは遺伝子の病気であることがわかり、診断・治療が大きく変わったこと、特に近年の化学療法の進歩は目覚ましく、分子

会場風景

開会の辞を述べる佐藤会長

座長を務める濱本名誉会長

標的薬や免疫チェックポイント阻害薬といった新薬が次々に開発され、ゲノム解析との組み合わせで、より効果的な治療が可能になってきたこと、さらには、がん診療連携拠点病院の相談窓口やセカンドオピニオンの利用、怪しい情報に騙されないための注意点まで、幅広く、しかもわかりやすくお話しいただきました。抗がん剤治療の歴史や免疫チェックポイント阻害剤の作用機序、パネル検査やリキッドバイオプシーといった最新のゲノム医療などについては、かかりつけ医や医療従事者にとっても参考となる内容でした。

がんと言えば、再発する、薬は副作用ばかりで効かない、痛い苦しいといったイメージがまだまだ強いですが、様々な相談体制が整ってきたこと、最新の手術、放射線、薬物療法、緩和医療を適切に組み合わせることで、もしがんになっても、無理をせず、今の生活を続けながら治療することが可能であるということを知っていただけたものと思います。その後、会場からの、ワクチン療法の可能性や遺伝性のがんなどについての質問にも丁寧にお答えいただき、参加者皆さんにとって、大変有意義な講演会となりました。

最後に、星川から、講師と参加者へのお礼、今後も大学と連携し、香川県の地域医療に貢献していくとともに、このような講演会も続けていく旨挨拶し、盛会の内に終了しました。

文責：讃樹會副会長　星川洋一（10期生）

後列左から星川洋一先生、濱本龍七郎先生
前列左から辻　晃仁先生、佐藤清人先生

香川大学医学部附属病院　2019年度医師臨床研修マッチング結果報告

香川大学医学部附属病院　卒後臨床研修センター

会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。常日頃から讃樹會より本センターへのご理解とご支援を賜り厚くお礼申し上げます。お陰を持ちまして、研修医育成を担う本センターとしての役割を果たすことができており、心より感謝いたしております。

令和２年度から医師になる医学科生らが臨床研修病院を選ぶ「2019年度マッチング結果」が、10月17日に公表されました。本院のマッチ者数は、MANDEGANプログラム（29名）、小児科プログラム（１名）、産婦人科プログラム（１名）であり、計31名でした。全国的に地方国立大学病院のマッチ者数が大幅に激減した中、31名の本学出身者の皆さんが、今春より本院で研修開始予定であることは嬉しい限りです（図１、図２）。

2020年度から卒後臨床研修制度は大幅な見直しとなり、７科目必修化に加え、「一般外来診療、訪問診療が必修」となります。緩和ケア、アドバンス・ケア・プランニング（ACP）など現代医療の重要課題も必修項目に設定されています。また、研修医評価では、指導医だけでなく看護師等の多職種による360度評価が求められています。本センターとしては、新臨床研修指導ガイドラインに基づき、４月からの研修医受け入れに向けて鋭意努力しています。

急激な人口減少・少子高齢化など社会構造の変化の影響から、地方に所在する国立大学病院では、研修医育成が大変厳しい状況に陥っています。医療の進歩は勿論のこと、社会保障費の増大、医師数の増加、さらに医師の働き方改革、地域医療構想など医療を取り巻く環境も激変していることから、医師育成は、時代の大きな転換期を迎えています。今後、本院もマッチング結果の低迷が危惧される為、医療への社会的ニーズの変化に対応した臨床研修を提供できることが求められています。

最後に、本院ならびに県内地域医療において必要とされる医師育成を目指す為に、会員皆様方より引き続きお力添えの程よろしくお願い申し上げます。

（文責：卒後臨床研修センター長
松原修司（平成４年卒・７期生））

中国四国９国立大学病院　大学別
医師臨床研修マッチング者数の累計（過去14年間）

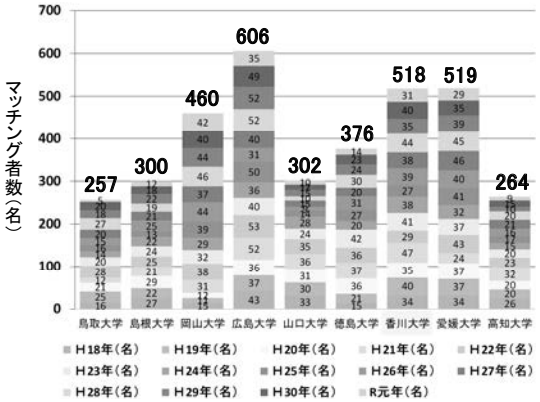


図２

42国立大学病院　2019年度マッチング結果

マッチ者数　順位

順位	病院名	募集定員	マッチ者数
1	東京医歯	114	110
2	東京大学	109	99
3	京都大学	80	80
4	神戸大学	71	69
5	九州大学	65	56
6	旭川医科	68	56
7	筑波大学	92	54
8	長崎大学	55	53
9	大阪大学	61	50
10	岡山大学	46	42
10	大分大学	48	42
10	千葉大学	52	42
13	滋賀医科	45	38
14	金沢大学	40	37
15	山梨大学	42	36
15	鹿児島大	48	36
17	広島大学	63	35
18	浜松医科	40	32
18	佐賀大学	50	32
20	香川大学	48	31
21	愛媛大学	56	29
22	東北大学	44	28
22	宮崎大学	50	28
24	北海道大	38	26
25	岐阜大学	36	23
25	山形大学	50	23
27	三重大学	30	21
28	富山大学	37	21
29	熊本大学	44	20
29	信州大学	45	20
31	福井大学	56	17
32	琉球大学	31	16
33	徳島大学	27	14
34	鳥取大学	44	12
35	名古屋大	23	11
35	新潟大学	51	11
37	山口大学	24	10
37	群馬大学	40	10
39	高知大学	49	9
40	弘前大学	45	8
41	島根大学	30	5
42	秋田大学	16	4

充足率　順位

順位	病院名	募集定員	マッチ者数	定員充足率(%)
1	京都大学	80	80	100.0
2	神戸大学	71	69	97.2
3	東京医歯	114	110	96.5
4	長崎大学	55	53	96.4
5	金沢大学	40	37	92.5
6	岡山大学	46	42	91.3
7	東京大学	109	99	90.8
8	大分大学	48	42	87.5
9	九州大学	65	56	86.2
10	山梨大学	42	36	85.7
11	滋賀医科	45	38	84.4
12	旭川医科	68	56	82.4
13	大阪大学	61	50	82.0
14	千葉大学	52	42	80.8
15	浜松医科	40	32	80.0
16	鹿児島大	48	36	75.0
17	三重大学	30	21	70.0
18	北海道大	38	26	68.4
19	香川大学	48	31	64.6
20	佐賀大学	50	32	64.0
21	岐阜大学	36	23	63.9
22	東北大学	44	28	63.6
23	筑波大学	92	54	58.7
24	富山大学	37	21	56.8
25	宮崎大学	50	28	56.0
26	広島大学	63	35	55.6
27	徳島大学	27	14	51.9
28	愛媛大学	56	29	51.8
29	琉球大学	31	16	51.6
30	名古屋大	23	11	47.8
31	山形大学	50	23	46.0
32	熊本大学	44	20	45.5
33	信州大学	45	20	44.4
34	山口大学	24	10	41.7
35	福井大学	56	17	30.4
36	鳥取大学	44	12	27.3
37	群馬大学	40	10	25.0
37	秋田大学	16	4	25.0
39	新潟大学	51	11	21.6
40	高知大学	49	9	18.4
41	弘前大学	45	8	17.8
42	島根大学	30	5	16.7

自大学出身者数　順位

順位	病院名	募集定員	マッチ者数	自大学出身者数	マッチ者に対する自大学出身者数の割合(%)
1	旭川医大	68	56	56	100.0
2	東京医歯	114	110	40	36.4
3	大分大学	48	42	36	85.7
4	山梨大学	42	36	33	91.7
4	鹿児島大	48	36	33	91.7
6	滋賀医大	45	38	31	81.6
6	佐賀大学	50	32	31	96.9
6	香川大学	48	31	31	100.0
9	京都大学	80	80	30	37.5
10	筑波大学	92	54	29	53.7
10	金沢大学	40	37	29	78.4
12	長崎大学	55	53	26	49.1
13	愛媛大学	56	29	24	82.8
14	宮崎大学	50	28	23	82.1
15	東京大学	109	99	22	22.2
15	広島大学	63	35	22	62.9
17	浜松医大	40	32	21	65.6
17	山形大学	50	23	21	91.3
19	神戸大学	71	69	20	29.0
20	富山大学	37	21	19	90.5
21	岡山大学	46	42	18	42.9
21	岐阜大学	36	23	18	78.3
21	九州大学	65	56	16	28.6
21	千葉大学	52	42	16	38.1
21	三重大学	30	21	16	76.2
21	福井大学	56	17	16	94.1
27	琉球大学	31	16	14	87.5
28	大阪大学	61	50	12	24.0
28	信州大学	45	20	12	60.0
30	北海道大	38	26	10	38.5
30	熊本大学	44	20	10	50.0
30	鳥取大学	44	12	10	83.3
30	山口大学	24	10	10	100.0
34	徳島大学	27	14	7	50.0
34	高知大学	49	9	7	77.8
36	東北大学	44	28	6	21.4
36	群馬大学	40	10	6	60.0
36	弘前大学	45	8	6	75.0
39	島根大学	30	5	5	100.0
40	新潟大学	51	11	4	36.4
40	秋田大学	16	4	4	100.0
42	名古屋大	23	11	1	9.1

20位　19位　6位

（2019年10月17日）

図１

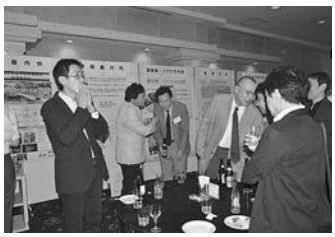
令和元年度香川大学医学部附属病院関係医療機関及び讃樹會合同懇談会を開催

日下　　隆（平成３年卒・６期生）

８月22日（木）リーガホテルゼスト高松において、令和元年度関係医療機関及び讃樹會合同懇談会が開催されました。この懇談会は地域の関係医療機関との診療連携や協力体制をより強化すること及び大学病院の現状等を報告することを目的に、大学病院が毎年開催しています。今年度は、新しい企画として本学同窓会讃樹會の先生方にも多数ご参加いただきました。また各科紹介のためのポスター展示を行い、関係医療機関等からは病院長等82名、本院から65名、総勢147名の医療機関懇談会としては過去最高数の参加がありました。

冒頭に、横見瀬裕保病院長から挨拶および大学病院の現状と将来構想等について、眼科の鈴間潔教授、周産期科女性診療科の金西賢治教授より教育・研究・診療の概要等の紹介がなされました。続いて、屋島総合病院 安藤健夫病院長及びキナシ大林病院 真鍋健史病院長よりそれぞれの医療機関の取り組み等についてご講演をいただきました

引き続き開催された懇親会では、讃樹會香川本部の同窓会も兼ねた、活発な意見・情報交換が行われ、大いに盛会のうちに終えることができました。



理事会議事録

令和元年度第２回　令和２年１月14日（火）20：00～20：40

１．第16回定期総会の日程及び記念講演会について

日程は５月９日（土）15：30、会場は医学部臨床講義棟１階に決定。

記念講演会の講師は香川県知事浜田恵造氏にお願いするという執行部案に決定。

２．次年度会長選挙及び理事選挙について（立候補者、理事候補者の公表）

立候補者、理事候補者の公表があり、選挙実施の流れの確認が行われた。12月20日締切の会長立候補者は平川栄一郎先生一名であったので、信任投票となることが説明された。所信表明及び推薦状は同窓会報に掲載される。理事選挙は、規程通り信任投票となる。

３．香川大学校友会設立について

香川大学同窓会連合会は、香川大学各学部同窓会（松楠会〈教育学部〉、又信会〈経済学部・法学部〉、讃樹會〈医学部医学科〉、木蓮会〈医学部看護学科〉、緑晴会〈工学部〉、池戸会〈農学部〉）の集合体組織であったが、香川大学創立70周年を機に、2019年11月２日に連合会を吸収した形で全学の同窓会的組織「香川大学校友会」が設立したことが、理事会において周知された。

香川大学校友会会長は学長が就任し、理事は各同窓会長並びに各学部長が就任する、更に会の構成員は香川大学の卒業生・修了生のみならず、在学生、現職教職員、退職教職員までを含む等、設立趣意書並びに会則を資料として確認された。

４．香川大学入学生誓約書への追加内容について

令和２年度以降入学者の誓約書の個人情報利用目的に「香川大学校友会がその活動を行うための情報」の一文が追記されることに合わせて、同窓会や後援会も同様に加えるかどうかについて本学から讃樹會に意見の確認があった。讃樹會として準会員把握のための手続き事務が簡易化されるので同窓会を加えた一文としてもらうことが承諾された。

ただ、情報提供を受けた時点で、讃樹會としては個人情報の紛失や漏出には十分注意が必要であることが再確認された。

５．会員情報利用申請への対応原則について

「讃樹會会員の個人情報利用の取扱いに関する基本方針」について、問題点が検討された。

「１．個人情報の使用目的」について」

①讃樹會が取得する個人情報の使用目的（ア）～（キ）のうちで、「（キ）その他、讃樹會会員に関する業務」は、解釈の仕方によってどのようにもとれる文言であるため、解釈が分かれない明快なものに訂正するか、または削除するか、今後の検討課題とする。

②「上記利用目的以外に個人情報を利用する場合は、書面により同意をいただくこととする。」は、まず、ア～キに列記した利用目的以外の利用とは具体的にどういうことがあるかの検討が必要である。次に、書面により「誰に」同意をいただくのか、「個人情報の本人」からの同意とわかるように修正することが必要である。

「２．個人情報の提供・利用」について

現在、「個人情報利用申請書」を提出してもらい、基本方針の使用目的の範囲内であれば事務局長の承認により情報の提供を行っているが、近年、判断が難しく執行部による審議が必要なケースも増えてきていることから、適正で効率的な情報提供の判断のもととなる原則を作る方向でまとまり、執行部で対応原則の修正案を練って今後も継続審議することとなった。

６．その他

毎年の卒業生が寄贈する卒業記念としての植樹や、石碑、何らかの記念品について、樹の場合は枯れてしまった場合もあったり、植樹や石碑のあるスペースに工事の石が置いたままであるのを目にしたこともあり、少し気になっているとの意見が挙がった。それを受けて、▶１期生卒業後、30年以上経っていることであるし、一度、大学に問い合わせるなどして、卒業記念寄贈品について調べて現状を把握してみたらどうか、▶調査した結果を同窓会報で特集してもいい、▶枯れるなど不備が出ているものは寄付を募るなど次のステップに動いてもいい、▶今後の卒業生が大学に何を寄贈するかのヒントにもなるかと思う、などの意見が出て、まずは卒業記念品の現状把握を行ってみることになった。

令和元年度研究助成金/研究奨励金　受賞の言葉

讃樹會研究助成金受賞のご挨拶

香川大学医学部附属病院　小児科
中村　信嗣（平成16年卒・19期生）

この度は香川大学医学部同窓会・讃樹會より研究助成金を賜りました事、大変光栄に存じます。また、御審査頂きました諸先生方並びに本会会員の先生方々に、この場をお借りいたしまして深く御礼申し上げます。

私は、平成16年（2004年）に本学卒業後、本学附属病院にて卒後臨床初期研修を行い、その後、本学小児科学講座に入局いたしました。入局後は大学院に入学し、一般病院と大学病院で一般小児科、新生児集中治療の経験を積みながら、伊藤進名誉教授、日下隆現教授のご指導の下、新生児低酸素性虚血性脳症（HIE）児の病態解明に関し、特に脳循環酸素代謝変化に着目した研究を続けてきました。大学院時代の研究は「長期間生存可能且つ一定の脳障害を認める新生仔豚HIEモデルの作成」を主テーマとして研究を行い（Nakamura S, et al. Brain Dev 2013）、大学院卒業後は讃樹會からの研究奨励賞を頂き、この作成したモデルを用いて脳循環酸素代謝モニタリングによるHIE脳障害の定量的重症度判定方法の開発、そしてHIEの標準治療である低体温療法が脳循環酸素代謝に及ぼす影響などを検証してまいりました。2014年からは讃樹會から国外留学助成金を頂き、オーストラリア・メルボルンにありますMonash University, the Richie Centreにて、早産羊におけるドブタミンによる脳保護作用に関する研究（BrewN, Nakamura S, et al. Pediatr. Res 2018）、胎児羊を用いて胎児における大脳皮質感覚野における脳循環酸素代謝の発達的変化に関する基礎研究を行いました（Nakamura S, et al. J Physio 2017a; 2017b）。国際共同研究加速基金獲得後は、Australian synchrotron centreにて、早産羊・大脳皮質における更に詳細な脳血管反応の発達的変化について国際共同研究を続けています。また、2016年に帰国後、元来の研究テーマであるHIEの病態解明に加えて、新規治療法の開発を行っております。

この度採択頂きました研究題目は、「新生児低酸素性虚血性脳症（HIE）に対する低体温療法・水素ガス吸入による新規脳保護治療戦略の確立」です。HIEは1000人に２、３例起こる、短期予後・長期的予後不良（脳性麻痺、発達遅滞、学習障害など）な新生児疾患です。現在、HIEに対する標準治療として軽度低体温療法（TH）が行われていますが、その予後改善効果は限定的で、約半数のお子さんたちが予後不良であるため、THと併用した新規脳保護治療法の開発が望まれています。

分子状水素は、フリーラジカル、特にヒドロキシラジカルを選択的に消去し、酸化ストレスを軽減することで脳障害軽減効果をもつことが大澤教授により2007年にNature誌に報告されました。以降、成人領域における分子状水素の脳保護作用に関して、基礎研究による報告が多くなされ、また近年、本邦では臨床研究も行われるようになりました。しかしながら、新生児領域における研究はあまり多くはなされていません。そこで、当科日下隆教授と私たちは、この分子状水素の脳保護作用に着目し、HIEに対し、THと併用する新規治療法の開発研究を進めてまいりました。既に、新生仔豚HIEモデルを用い、水素ガス吸入療法の脳保護効果について検証し、低酸素虚血負荷後の蘇生直後からTHと水素ガス吸入を24時間行い、TH＋水素ガス吸入併用療法群ではTH単独治療群より、運動機能が早期から回復すること、また負荷後５日目での大脳皮質灰白質の細胞死が優位に軽減することを報告しました（Htun Y, Nakamura S, et al. Sci Rep 2019）。本研究では、更に今後の臨床研究への応用を視野に入れ、脳循環酸素代謝変化を低酸素虚血負荷の指標として重症度を調節することで脳障害重症度別の新生仔豚仮死モデルを作成し、重症度別に水素ガス吸入療法の治療効果判定を行う事を主目的としております。本研究成果から、本学、四国から世界にむけてHIEの新しい治療を発信し、ベッドサイドの子どもたちの予後改善に少しでも貢献できるものとなればと考え、これまで以上に精進を重ねていく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほどをよろしくお願いいたします。

讃樹會研究奨励金受賞の言葉

香川大学医学部附属病院　循環器・腎臓・脳卒中内科
守時　政宏（平成19年卒・22期生）

この度は2019年度香川大学医学部医学科同窓会讃樹會研究奨励金に採択頂き深く感謝申し上げます。関係者の方々、ならびに選考委員会の先生方には心より御礼申し上げます。 私は2007年に本学を卒業後、高松平和病院で初期臨床研修を行った後、香川大学医学部循環器・腎臓・脳卒中内科に入局いたしました。入局と同時に大学院に入学し、最初の１年間は香川県済生会病院で腎臓内科医員として勤務しました。その後大学に戻り、医員として１年間病棟業務に従事し、その後当大学の免疫学前教授の平島光臣先生や薬理学の西山成教授のご指導の下、Galectin-9（Gal-9）に関する研究を行いました。

Gal-9はレクチンの一種であり、好酸球遊走因子として当大学で発見されました。その後の研究で、Gal-9は炎症性サイトカイン産生細胞と制御性T細胞などの免疫抑制性細胞のバランスをとることによって免疫調節に重要な役割を果たすことがわかり、自己免疫疾患や癌領域などにおける報告がなされてきました。大学院ではループス腎炎モデルマウスに対するGal-9の効果に関する研究を行い学位を取得することができました。

今回心腎連関に着目し「免疫調節因子ガレクチン－９を用いた心腎連関新規メカニズムの解明」というテーマで採択いただきました。昨今の高齢化に伴い、慢性腎臓病や慢性心不全の患者が増加しており、両者が合併することもしばしば見受けられます。心腎連関のメカニズムとして、体液過剰、腎性貧血、交感神経活性、レニン-アンジオテンシン系の活性化などを中心に報告がなされていますが、免疫調節機構に着目した研究はほとんどありません。腎臓内科と循環器内科が一緒になった当講座の特色を生かし、また当大学が発祥であり、多数の報告がなされているGal-９を用いて心腎連関の新しいメカニズムを解明することで、患者の予後改善に貢献できるよう精進して参りたいと思いますので、引き続きご指導・ご支援賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。この度は助成に採択いただきまして誠にありがとうございました。

◆◆研究助成金/奨励金　2020年度公募についてのお知らせ◆◆

2019年度より、申請書様式の記載方法が下記の箇所について**変更・統一されました**。
申請の際にはご注意ください。
応募要領並びに申請書は讃樹會HPからダウンロードしてご利用下さい。

「研究助成金／研究奨励金申請書記入要領」より

記入方法に注意！

６．申請者の主な略歴（第６号様式）
現在から過去に遡って記載して下さい。

７．申請者の主要な発表論文欄（第７号様式）
最近５年以内に発表されたオリジナル論文を記入して下さい。（解説・総説は含まない）
現在から過去に遡って記載して下さい。

論文の著者は**申請者並びに申請者より前の著者を全員書いて下さい。**

寄稿　讃樹會の書を書かれた、小森秀雲先生の書道教室

日下　隆（平成３年卒・６期生）

平成14年に揮毫いただき、額装された讃樹會題字。

私は一昨年前の秋から、NHKカルチャースクールの書道教室に週一回通っています。そこでの指導者は現在92歳の小森秀雲先生です。先生は日本でもトップクラスの書道家として活躍され、私たちの讃樹會の表記を素晴らしい書道で書いて頂いています。多分、この事実を知っている讃樹會会員の先生方は殆どいらっしゃらないと考えますので、私から見た秀雲先生を紹介させて頂きます。

私はこれまでの自分の経験の中で、海外留学や海外の方々との共同事業を行う場合、自分の日本人としてのアイデンティティを考える重要さを認識してきました。その中で、日本語の言葉や特に自分の書く文字の重要さを改めて知り、特に書道の重要さを感じていました。小学校の時分、秀雲先生の自宅で開催されていた書道教室に毎週、徒歩で通っていましたので、今回の書道教室の案内を見つけた時は本当に嬉しく思い直ぐに申し込みをしました。しかし教室が人気とあって、予約から約２年近く経過して、ようやく実際の教室に通えるようになりました。再度、お会いしたのは43年ぶりでした。

秀雲先生が書道展の芳名帳に書かれた書。

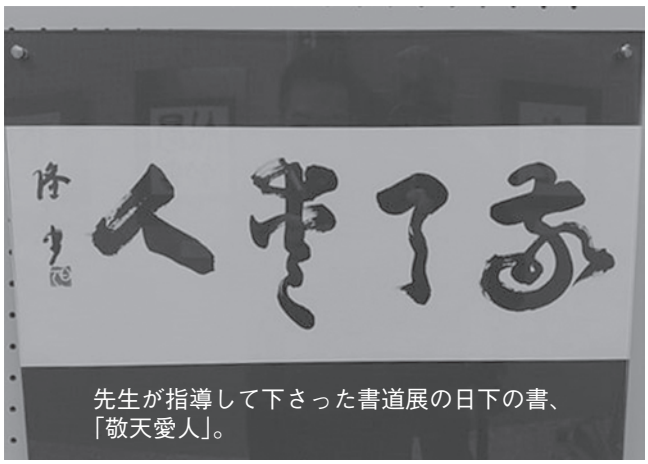
先生の教室での姿

秀雲先生はご高齢ですが、全く年齢を感じさせない気迫と集中力、優しさとユーモアを持ち合わせておられます。しかしその教室での姿勢は、書道のみならず人生の様々な場面に影響を及ぼす教育者としての徳が垣間見えます。私が

書道教室に通いだした頃、先生が最初に語って下さった言葉は、「上手に書こうとせず、楽しんで書いて下さい。」との事でした。確かに私の通う教室は、書道家の同人や教室の先生方が多く在籍する超上級者クラスですが、その方々に自分の書のレベルが追いつくはずもありません。その個人のレベルに応じた楽しさを考え、自分の目標を自ら作り達成していく楽しみを教えて頂いています。また特に記憶にありますのは、「もっと自信を持って書きなさい。」という言葉です。実際にその言葉の前後で、自分の書いた書が明らかに変化していて、のびのびと書かれた書に、自分自身で大変驚いた経験をしました。このことは書道のみならず、私たち医師、教育者が特に認識しなくてはいけない事ではないでしょうか。若い医師や学生に対し、叱咤するだけでなく、その個人の特性を見つけて伸ばす、大事な言葉かけの方法ではないでしょうか。

秀雲先生は教室の２時間の限られた時間で、様々な種類の書の添削をなされます。数枚書かれた書の選択は一瞬で、0.5秒程度でよい作品を選ばれます。一人一人に朱色の墨で丁寧に直し、そして丸や100点を記載して頂き、私自身この年齢で褒められることは皆無だからでしょうか、本当に嬉しく思います。時には、自らが

先生が書かれた条幅の書


先生が指導して下さった書道展の日下の書、「敬天愛人」。

条幅といった大きな半紙に書を描く姿を見せて下さいます。常に練習をされ、学ばれる姿勢が伝わってきます。その迫力や熱気は私たちをはるかに凌駕する勢いで、そのエネルギーの持ち方は、100歳時代と言われる現在の理想とすべき生き方のようにも感じます。先生の身体や生活様式を観察、解析することで、現代文明のミスマッチ病と考えられている生活習慣病や痴ほう症の予防策が解明される、多くのヒントが見つけられるのではないでしょうか。先生との出会いは、私にとっては人生の様々な対処方法や重要な生き方の学びが出来る、とても大事な時間です。今後も小森秀雲先生の益々のご活躍とご健康を、心からお祈りしています。

小森秀雲先生のプロフィール。

本名・三朗。1928年、高松市生まれ。小学校教諭として勤務する傍ら、51年から中原一耀さんに師事。日展入選、県展文部大臣賞などを受賞。県美術家協会名誉会長。県内の書道愛好家らでつくる「墨華書道会」名誉会長、公益社団法人「毎日書道学会」会長、2018年には旭日双光章を受章されています。「書は才能は二の次で、努力する人にかなわない」が持論だそうで、うまくなるには継続が大切。いつになっても納得のいく字は書けないため、今でも勉強の為毎日練習をされているそうです。昨年末も、「今日は年賀状を500枚書いてきた。」と、仰っていました。

小森秀雲先生から書を教わったもう一人の学徒として　三木　崇範（平成３年卒・６期生）

日下　隆先生が小森秀雲先生から書を習われていることを知り驚きかつ嬉しくなりましたのでこの稿に追加として寄稿致します。

私は高松第一高等学校を卒業しました。当時、芸術の授業（音楽、美術などからの選択だったと記憶しています）で書道を選択し書道Ⅰと書道Ⅱをそれぞれ高校１年、２年次に小森先生から習いました。当時の教科書「書の美」は今でも大切に保管してあります（写真）。今思い起こすと、小森先生は筆で書くことを楽しませてくれる授業であったように思います。中でも印象的だったのは、水面に墨（黒や薄紫）で模様を描きそれを和紙に転写して、そこに和歌を仮名で書いたことです。まさに書道を楽しむことを教えて下さっていました。私は個人的には隷書が好きです。新聞名は隷書で書かれていることも教わり、書が著聞されていることを改めて知ったと同時に目に映るもの全てを感受するアンテナを張っておかねばならないことも学びました。

私が小森先生から直接習った当時から長い年月を経て、同級生の日下先生も小学校時代そして今日小森先生から書を習われていることに不思議な縁を感じずにはいられません。日下先生の書道教室の小森先生のご指導の様を写真で拝見すると、高校生の時に指導して頂いた時と同じです。これもまた懐かしく嬉しくなります。小森先生、どうかお元気で益々ご活躍下さい。

開業医だより（米国、ハワイ、ホノルル、米国家庭医）

太田　恵美（平成４年卒・７期生）

香川医科大学を卒業して、早くも、20年の月日が経ってしまいました。平成４年卒の太田（旧制　町田）恵美と申します。今回、近況を報告する機会を与えていただき、心から感謝しております。

まず、私の経歴を紹介させていただきます。長野県出身で、香川医大を平成４年に卒業し、卒業後は、地元である信州大学に帰りました。入局を決めるに際して、まず、癌を治す事に興味があり、また、手術をする事に挑戦したいという気持ちがあり、信州大学の外科学第２講座に入局しました。４年間の研修後は、呼吸器外科に所属し、胸部外科専門医および呼吸器外科専門医を取得しました。当時の信州大学の医局では、大先輩の先生方から、臨床研修を終え、大学に帰ったら、研究をして、学位を取り、その後、海外留学をして、一人前だと、口々に、言われました。素晴らしい先生方の影響を受け、私も、漠然と、海外留学を志すようになりました。信州大学病理学分子生物学の中山淳教授の元で、糖鎖研究に従事する事ができ、その研究業績がきっかけで、ジョンホプキンス大学癌研究所の Epigenetics の大御所である、Stephen Baylin 教授の元で研究員として、働く事になりました。当初は、信州大学、医学部第２外科学講座の助手休職という形で、留学させていただき、一年で、医局に戻るように、言われていましたが、ホプキンスでの研究が、エキサイティングになってきたため、また、長女も妊娠したので、信州大学の医局を、退局し、ジョンホプキンス大学に残る事になりました。ジョンホプキンス大学のスポンサーで、米国永住権を取得し、そのまま、研究者として、米国に残るという道もありましたが、長い研究生活の後、臨床が恋しくなり、臨床研修を目指すようになりました。仕事や育児の傍ら、試験勉強をするという毎日が続いた後、運よく、USMLE に合格し、米国で、臨床研修を始める事にしました。

研修プログラムの応募に際し、家庭医学講座（Family Medicine）に興味を持ちました。日本では、馴染みが薄いかと思いますが、米国の家庭医学科（Family Medicine）とは、新生児から大人、婦人科も含める、究極の総合診療医を育成する専門科です。運良く、ハワイ大学医学部、家庭医学科のレジデンシープログラムにマッチする事ができ、３年の研修終了後、米国専門医を取得し、2016年、12月にホノルル市内で、開業し、現在にいたっております。

私のクリニックは、ホノルル市内の東部にあり、自分のクリニックで、週３回、診療し、アラモアナにあるクリニックでも週２回、また、オアフ島の西部のPearl Ridge でも、２週間に一回、診察を行っております。ハワイ大学医学部から、医学生さんを当院に研修に送っていただき、臨床の傍ら、ハワイ大学医学部の学生さんの教育にも、携わっております。毎日、患者様の診療、夕方からは、家庭の事、また、自分のクリニックの保険金請求や経営等の仕事をしなくてはならず、まさに、毎日、寝る時間以外、忙しく働いています。

香川医大卒業生の皆様、ハワイにいらっしゃる際に、是非、ご連絡ください。また、学生さんや、卒業生の方で、米国研修に興味がある方は、また、ご連絡ください。

クリニックのスタッフと一緒に

太田恵美
オハナクリニック
850 West Hind Drive, STE 205
Honolulu, HI 96821
Email: eofamilymedicine@gmail.com
Ohanaclinic.com

女性医師特集 in 香川

今回の女性医師シリーズは、地元香川県で活躍されている先生方をズームアップ。
2020年１月現在、卒業生3300名中、香川県内在住約1000名、
男女比は３：１となります。様々なお立場の先生方に、近況報告を頂戴しました。

医療法人社団海部医院　理事長	海部久美子（大学院平成21年修了）
介護老人保健施設あおのやま　施設長	関　亜紀子（平成７年卒）
白神眼科医院　院長	村田　晶子（平成８年卒）
香川大学医学部附属病院小児科	加藤　育子（平成14年卒）

置かれた場所で咲くために

医療法人社団海部医院　理事長
海部久美子（大学院平成21年修了）

私は平成17年４月に香川大学大学院医学研究科博士課程に入学、７月からは循環器腎臓脳卒中内科へ入局、諸先生に熱いご指導をいただき、平成21年３月に博士課程を修了し、讃樹會の一員となりました。その後も医局に在籍させていただき、この間は素晴らしい指導医の先生と、キラキラした後輩と共に楽しみながら多くのことを学ぶことができた６年間でもありました。

今、振り返ってみるとなんと多くの人と出会ってきたことだろうと思います。これまでの出会いは私の大きな財産となっています。

失敗を重ねても、大きな忍耐力で見守ってくださった先生、いざという時に大切な助言を下さり、迷いを振り切ってくださった先生方がいたからこそ前に進むことができました。感謝の気持ちは忘れていません。これからもどうぞ宜しくお願い致します。とこの場を借りてお伝えしたいです。

平成25年11月より海部医院医院長となり６年の歳月が過ぎました。独立してようやく人の役に立てる存在になり得るかも知れない自分の存在に気づきました。

自医院では地域医療に目を向け、患者、社会のニーズを敏感に感じ、素早く行動することを心がけています。屋島、古高松、庵治地区では急激な高齢化を目の当たりにします。当院は数少ない有床診療所でもあり、その特徴を活かすことができるよう救急指定を受け、地域密着型の救急医療にも携わっています。

また、香川県医師会では常任理事に任命いただき、男女共同参画、医療継承についての活動を行っています。

近年の女性の社会進出はめまぐるしいものがあります。私自身は自分が女性であるために何か問題を感じたことはありません。むしろ医師という職業においては、女性特有のしなやかな感性を生かしてこそ、患者に寄り添える医師になり得るのではないかと感じています。より一層の女性医師の活躍を期待し、微力ながらもお力添えができるように努力します。

香川大学医学部附属病院とは密接に連携する機会が多くあり、急患の依頼やアカデミックな情報などいつも刺激を受け感謝しています。 大学勤務の先生方に接する折には、常に変化と開拓・発展を感じています。私も是非その一員として協力、挑戦できるよう引き続きご指導をよろしくお願いいたします。

当院施設は昭和54年４月竣工、昭和63年増築、平成14年増改築を行いました。近年の防災に対する一環として、また必ず起こりうるであろう南海トラフの大地震に向け、建物の耐震診断を行い、関係官庁の指導の下、平成21年に耐震補強工事を完了しました。大地震が発生した際には患者様・職員の安全を確保するとともに、地域住民の皆様の安心安全な拠点として医療を提供できますように努力いたします。また、平成29年には有床診療所の義務としてのスプリンクラー設備を設置、令和元年にすべての透析機器が稼働できるよう

大学院入学当初より指導していただいた腎臓内科の先生方

（筆者 前列中央）

に、防災用発電設備を完備いたしました。 ハード面においても、常に十分な準備が必要であろうと思っています。

そして、香川県透析医会より災害時透析拠点病院として指定いただき、当院の患者様ばかりでなく他院の患者様・他地域からの患者様も受け入れる心意気で備えを考えてきました。いざという時の原動力は日頃の準備や心持ちからくるものだと考えています。

最後に、医院長というリーダーシップをとる状況に置かれたとき、この人のためならと協力してくれる仲間の大切さ、その中で調和を保つバランスを持ってこそ、その力が発揮できるということを痛感しました。そのためには自分自身が模範を示すこと、努力を惜しまず、これからも現状況に置かれた自分を客観的に見つめつつ、地道な努力を持ち味に地域医療の為に情熱を注いでいきたいと考えています。そして私自身、心も身体も健やかに、皆さんに笑顔と元気を与える存在でありたいと思っています。

『徒然なるままに～老健にて』

介護老人保健施設あおのやま　施設長
関　亜紀子（平成７年卒・10期生）

こんにちは、平成７年卒の関(旧姓宮武)と申します。

今回のお話をいただいて改めて考えてみると卒業して早25年！

また娘の同級生が何人か40期生として医学科に入学したという話も聞いたりして、自分はもうそんな世代なのかと衝撃を受けています。

私は卒業後、香川医大の第二内科に入局し１年半ほど研修をうけてから滝宮総合病院に勤務しました。循環器の診療中心で心カテ検査等ご指導頂きましたが超不器用・思考ゆっくりタイプで指導医の先生には迷惑をかけてしまいました。夜間の緊急呼び出しも頻回で、しんどいことも多かったですが上部消化管内視鏡検査や透析、いろんな地域へのバス健診など幅広く学ぶことができて充実した３年間でした。

その後、大学に戻ってすぐのタイミングで同期の夫（当時大学院生）と結婚。大学に勤務しつつ週数回の心エコー外勤という生活をしていたところ同年に妊娠。経過は順調で、出産予定日ぎりぎりまで働きます！と言っていたらまさかの５か月に入ってから切迫流産の危機にさらされました。このときは本当に驚きました。少しだけ出血していたので、心配なさそうだけど念のためにと受診したら即入院、24時間持続点滴。ショックでした。妊娠を甘く見ていたと猛反省しました。

それまで入院経験がなくて、じっとベッドに寝ていることがこんなにしんどいのかと思い知らされました。好きなテレビや本を見ているだけなのに。産婦人科の先生方のおかげで２か月の入院後、安定して退院でき安静生活へ。仕事は休ませてもらい、ゆっくり過ごして無事出産しました。

出産後２か月で外勤（週数回・午前中だけ）復帰。夫もハードな一般病院勤務で県内に住んでいる両親や、当時は遠方に住んでいた義親に助けてもらいました。

仕事のあいだ、私の自宅に来て子守してくれたので安心して復帰できたのです。

そして子どもが一歳を迎えるころ、外勤先の病院が老健を新設するので施設長にどうだろうかというお話を頂いて。もともと高齢者医療に興味があったものの医師としてまだ経験不足甚だしく（当時、卒後６年目）悩みました。

でもいい機会と思い、親からの後押しもあり挑戦すると決意し、早18年です。

老健（介護老人保健施設）は、自宅などへ戻るためのリハビリ中心で看護・介護支援専門員（ケアマネ）・介護・理学療法士・作業療法士・栄養士などさまざま

（筆者 前列中央）

な職種のスタッフが連携しています。

急な骨折などで、近隣の病院の先生方に無理を言って助けていただくこともあり本当に感謝しています。ありがとうございます。

老健の悩みとしては、医療保険が使えないために思うような医療が難しいことです。

病院勤務の頃は、薬などの値段も気にしたことがなかったけれど老健だと飲み薬や塗り薬なども一つ一つ値段を確認して注文。いかに低予算で入所者・家族のかたの満足度をあげるか、日々試行錯誤しています。

看取りまでの対応を希望される方もとても多く、年平均十数人の方々を見送っています。本来の老健の役割ではない気もするのですが・・・。

看取りは24時間対応しており、夜中の呼び出しが年々きつくなってきました。

人手不足で夜間は看護師不在（介護のみ）のため、少人数で待機を担当してくれている看護師さんたちの疲労も心配です。子どもが中高生時代は、夜中よりも朝のお弁当準備や家族を起こしたりする朝６～７時頃の呼び出しが難関でした。

先日、ある加算をとるための講習会に参加したら大阪・兵庫・岡山など他地域の老健施設長仲間の先生たちとお話しすることができて、同じような悩みをもつ方も多くて少しホッとしました。（施設によって驚くほど差があるなとも思いました）

最近の楽しみとしては、関東地方で一人暮らしをしている娘とラインなどでやりとりすることです。高校時代、演劇部で全国優勝し国立劇場で上演という貴重な経験を得た娘(『フートボールの時間』という劇です)、芸術に興味をもち大学で芸術を学んでいます。軽音楽部でバンド活動もしており、私の知らない世界のことをいろいろ話してくれるのでワクワクします。

今回のこの近況報告のお話、本当にタイミングが良かったです。

昨年の今頃は、受験のことで私は精神状態ぐるぐるで（冷静でいようと思うのについ）子どもの足を引っ張らないように、と頼りになる夫に助けてもらいながらなんとかぎりぎり日々の業務をこなしている状況でした。このように今までのことを振り返る心の余裕ができたのは、最近のことです。これからも、家庭とのバランスをうまくとりつつ仕事を続けて行きたいと思っています。

心に移りゆくよしなしごとを

白神眼科医院　院長
村田　晶子（平成８年卒・11期生）

同窓会員の皆さま、日々それぞれの場でご活躍のことと存じます。Ｈ８年卒　村田晶子です。

今回、香川県内で勤務している女性医師ということで選んでいただきましたが、いざ書こうとするとタイトルも内容も自由と言うことで途方に暮れてしまいました。徒然草ではないですが、この１年で仕事の環境が変わったことから初めて、思いつくままに書いてみようと思います。

2018年10月に、第三者継承で高松市にて開業しました。火・水・金曜日の午後は自院もしくは他院で手術となっており、手術が好きなのでとても楽しく仕事ができています。私が香川大と三豊総合病院に診察や手術に行くときには、大学の眼科医局の先生が代診に来てくださり、同門のありがたさを日々実感しています。鈴間教授をはじめ、眼科学講座の先生方、心から感謝いたしております。

近隣を含めた香川県内の大きな病院も、同窓の先生方がたくさん勤務されています。私が卒業したときにはほぼ岡大や徳大の病院だったことを思うと、隔世の感があります。先輩方をはじめ、同窓の皆さまが努力してこられた結果と、とても頼もしく思っています。同窓の先生方には、勤務医時代も現在も、様々な場面で助けていただいております。ありがとうございます。

眼科医にもいろいろ専門分野がありますが、私が専門として力を入れているのは涙道・涙液とロービジョンです。なかでも涙道疾患の手術治療が診療の主体で、主に涙道内視鏡手術を行っています。涙道疾患に関連して、腫瘍や眼形成も少し勉強しています。いずれも眼科の中でもマイナーな分野ですが、どの分野もとても面白く、奥が深いと思っています。

涙道内視鏡の直径は0.9mmと細く、解像度も１万画素と低いのですが、それでもよく観察すると様々な所見を見つけることができます。涙道内視鏡を用いた涙管チューブ挿入術は日本で開発された術式で、かなり成熟した今でもいろいろな発見や進歩があります。涙

道はあたらしい分野ならではの熱意や各人の創意工夫、未来へのわくわくとした希望があると思っています。腫瘍やロービジョンも含め、専門として診療なさっている方の熱量が高く、学会に参加するといつも元気とやる気をもらって帰ってきています。

現在私が興味を持っているテーマは抗がん剤による眼障害です。様々な薬剤で眼障害が出ることはわかっており、特に涙道障害は治療時機を逸すると不可逆性の障害となります。涙道専門医のはしくれとして、不可逆性の障害にせずに化学療法を完遂できるように、なんとかしたいと考えています。なるべく発症を抑えられるようにどうすべきか、専門外の医師にはどういう点に注意して診療してもらい、どの症状があれば専門医に紹介してもらうべきなのかなどについて、機会がある度に他科の先生にお願いし、眼科医の会で話すなどしているところです。

抗がん剤による眼障害は、眼科医には常識となりましたが、他科の先生方にはあまり広まっていない内容かと存じます。生命には関わらないのですが、涙や眼瞼の炎症で不快かつ見えにくくなる、様々な障害によって視力が低下するなど、患者さんのQOLを著しく低下させます。この場をお借りして恐縮ですが、化学療法中の患者さんの診察時には、涙や眼脂が出ていないかとお訊ねいただき、症状があればすぐ眼科医にご紹介いただけますよう、お願い申し上げます。

気がつくと卒後24年目もあと少しとなりました。来年度は卒後25年で、同窓会を予定しています。Ｈ２年入学もしくはＨ８年卒の皆さま、同窓会の案内はなるべく早くしますので、ぜひご参加ください。三木町でお待ちしています。　（2019年12月稿）

仕事と子育て、そして介護がきた！

香川大学医学部附属病院　小児科
加藤　育子（平成14年卒・17期生）

我が家の３人娘も年齢を重ね、小学校５年生、小学校１年生、年少となった。かわいがっていた長女はすでに私の身長を追い抜き、額にできたニキビを気にして日々美容に気を使っている。赤ちゃんだと思っていた末娘は、保育園で習った英語の発音を父親に教えるようになった。小児科医として働き始めて17年が経とうとしており、その間に私の家族は大きく変化したと感じる。

香川医科大学を卒業し、出身地の三重で小児科医として研修を始めたころ、入院患者の母親から「ミルクの量はこのくらいでいいですか？」や「指しゃぶりをしてるのですが、いいんでしょうか？」などの質問に答えられず、その場を切り抜けるための適当な答えを返していた。今思うと、お母さんたちに本当に申し訳ないことをしたと反省する。その頃は、小児科医としての診療に一生懸命で、育児支援自体が小児科医としての仕事だと思っていなかった。新生児集中治療室勤務時は、病院で毎日寝泊まりしながら500g未満の赤ちゃんの治療に携わり、母親代わりの気分で育てることや、大学病院では悪性腫瘍の小児患者の治療をして小児科医としての満足感を感じていたことは事実である。その頃は、正義のヒーローのような気分で使命感に囚われていたのではないかと今となって自省する。現在私は、香川大学小児科外来にて主に乳児健診、育児支援を行っているが、小児科医にとってその大切さ

三人娘たち
消化器内科医の夫は掲載拒否

を教えてくれたのは３人の子育てからである。

最初の妊娠は小豆島の内海病院にて小児科医１人体制での勤務中であった。30代となり、自分の子どもを見てみたいと思っていたため嬉しく思ったのも束の間、悪阻に襲われた。気持ち悪さを紛らわせるため、外来に備えられている冷蔵庫に梨を常備し、数人診察するたびに口に入れていた。私にとって休養がいいわけでもなかった。休日の方がさらにひどい吐き気に襲われていたため、休日や夜間自宅で過ごすことの方が恐怖で、私自身は診療時間が吐き気を忘れられる時間となっていた。さらに、出産後の育児休暇は久しぶりに味わう“休暇”だと楽しみに思っていたことも誤算であった。小児科医としてのプライドは、初めての育児の困難さより大きく崩れ、それまで味わったことのない挫折感を感じ、それが内科医として当直や診療など“子どもがいても普通に仕事をできる”夫への攻撃につながったように思う。今となっては耐えてくれた夫に感謝である。そんな状態で、３人出産後は勤務時間は調節しながら、いずれも産後２～３か月で仕事復帰をした。自分自身の子どもとの時間を大切にしながらも、小児科医として自分の特徴を生かした支援を行うことで、一人でも多くの赤ちゃんと両親の関係がうまくいくことを願いながら支援ができたらと思っている。

ここでは、犠牲が沢山ある上で、私が育児も仕事もやりたい事をさせてもらえていることを伝えたい。一つは医局員や同僚に感謝をしたい。働き方改革は少しずつ進んでいるものの、全体の仕事が減ることは現状難しい中で、私は育児中で当直等業務内容を配慮していただいている。大学内で勤務する女性医師が徐々に増加し、保育園や育児短時間勤務などいろいろな女性支援体制が整う中、権利だけを主張する時期は過ぎたのではないかと思う。育児中の女性が担当可能な範囲の仕事は率先して行い、できない部分を分担してくださっている同僚の手助けとなれないかを日々考慮することで、お互い気持ちのいい仕事環境ができないかと考えている。また、家族にも負担を強いていることは否めない。先日“ママが仕事でいつも宿題見てくれないじゃん！！”と泣いた娘に対して、言葉も出なかった。食事も習い事の送り迎えも家事サービスに頼み、最高のサービスを提供していると勘違いしていたのかと反省した日であった。10日間の海外での学会参加中にたまたま小学校の弁当持参日があり、夫が朝早くから四苦八苦して数千円かけたお弁当を作成してくれたことも本当に感謝をしている。

育児支援を小児科診療として行うにあたり強く感じるのは、母親一人一人の考えがあり、それぞれの家庭で良いと判断されることが違うことである。私は、周囲に負担をしていただきながら、診療・教育・研究と好きに仕事を継続させてもらっている。しかし、中には育児に照準をあてて、セーブしながら仕事を継続していきたい方や、通常勤務をして育児はある程度家族の支援を頼りたい方もいて、それぞれの価値観がある。また、妊娠中においても体調不良で休養が必要な場合や、そうでなくても配慮のみで可能な場合もある。それぞれの価値観や状況にあった働き方が選べ、育児中の女性を支援することだけではなく、医師全員が家庭と仕事においてバランスよく生きられるようになることを願う。そして、小児科医にとって育児が自分自身を成長させてくれることだと次の世代の先生方には伝えたい。

最近まで病気一つなかった私の父母であるが、父が初めて長期入院となった。介護というものが現実的になり、今の私の生活にさらにのしかかってきている。育児と仕事ですでにギリギリの生活だと感じていたが、今後もさらなる悩ましい日々は続くであろう。しかし、この中でも、家族の笑いを大切に少しでも楽しんでいけるように過ごしたいと思う。そして、全く違う性格の３人娘の成長をしっかり見届けていきたいと思っている。

ミャンマーからの留学生インモン先生の学位審査後の一枚。小児科スタッフと。(筆者は一番後ろの向かって右から二番目)

特 集　「学生の活躍がすごい！」

香川大学医学部剣道部の活動

第71回西日本医科学生総合体育大会（2019年8月12日・13日）

剣道部門　女子団体の部 優勝　女子個人の部 準優勝

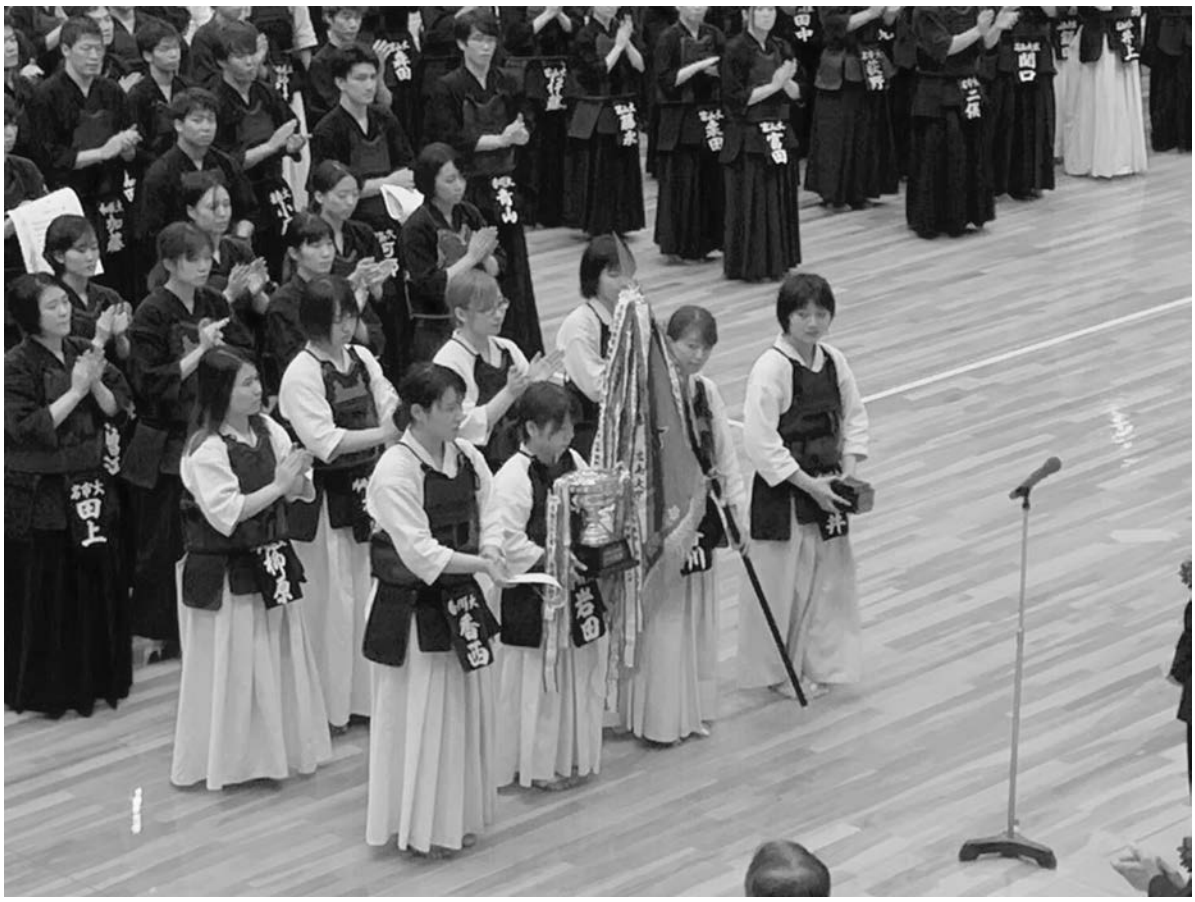
西医体優勝後の写真。左から香西華織（２年）、岩田凌花（３年）、亀井美里（５年）、香川真理子（５年）

２年　今戸　舜介

このたびは、香川大学医学部剣道部が今年の８月12、13日に行われた第71回西日本医科学生総合体育大会剣道部門において、女子団体の部優勝、女子個人の部準優勝という結果を残したということで、この場をお借りして現主将である私が西医体を含む大会での活躍や、日々の練習の取り組みについてご報告させて頂きたいと思います。

香川大学医学部剣道部は、毎年５月に中四国大会、10月に四国大会、そして８月には西医体に出場しています。この年にわずか３回という数少ない試合にむけて、私たちは月水金の週３回で１日２時間という短い練習を行なっています。それでも、昨年の中四国大会では女子団体の部で優勝を果たし、そして今年の中四国大会でも同メンバーで女子団体の部準優勝、女子個人の部準優勝、そして西医体で女子団体の部優勝、女子個人の部では準優勝をすることができました。日々の短い練習でこのような結果が出せたのは、前主将の指導の下、１人１人が日々の練習を集中して高い意識で取り組むことができたからだと思います。また、OBの先生のご支援や、マネージャーのサポートもあり、OBの方や外部の方が練習に参加していただき、ご指導いただいたことでさらに成長することができました。そしてなにより、メンバーの４人がお互いを支えて励まし合い、高め合うというチームワークがあったからこその結果だと感じました。

今、私たちは次の大会に向けて日々練習に取り組んでいます。毎年冬が来ると１週間強化練を行い、夏になれば１週間の朝練もあります。また、四国の医学部剣道部で行われる４大学定期戦、岡山大学との定期戦などといった、大会に向けた実践的な練習も行います。どれも心身共に厳しいものではありますが、来年も優勝に向けて部員一同頑張っていこうと思っております。最後まで読んでいただき誠にありがとうございました。



閉会式時の優勝旗、トロフィー、メダル授与

記　念　写　真

ヨット部　2019西医体優勝

集中と諦めない心

4年　大和　徳幸

歴史ある優勝杯を持ち帰った！

「西医体での優勝」この言葉は私が入部した最初の本新歓の時から高らかに掲げていた目標だった。そしてようやく、令和元年度の記念すべき西医体で達成することができた。

私達が行っているディンギーという種目は、二人一組で約4.7メートルのヨットを操作してゴールするまでの順位を争い、レースを幾度か行い順位の合計値の低いものが勝利していく競技である。更に、西医体は各大学から国際470級とスナイプ級という艇種から１艇ずつを出し、それぞれのクラスの合計値で大学ごとの順位が決定される。その上、水面は平坦ではなく、波に合わせて体を使うことや風の強弱や振れを予測しコースを選択するなど、常に変化しうる状況を予測し即座に対応していくことがレースで勝つことにおいて鍵となる。

第71回医科学生総合体育大会本レースは、琵琶湖にて８月15日から18日を予定されていた。しかし、不運にも台風10号が直撃し、レース日が１日少なくなり、１日のレース上限を制限しないという特別ルールを設けることになった。

私とペアの５年木村が乗っている国際470級は、最初のレースより首位に立つなど独走していたが、どんどん集中が切れていき、うまく走らせることができなくなる状況に襲われた。３位を記録した後、二人で第一レースが始まった頃と同じようなルーティンを取るように心がけた。すると、集中力は戻り本来の調子を取り戻すことができた。これにより、そのまま６レースという長い一日を集中を切らさずに乗り切ることに成功した。

５年斎藤と３年岡本が乗っているスナイプ級は本レース前日に行われたプラクティスレースでトラブルに見舞われ、ヨットの心臓部分であるマストが曲がってしまうという事態に襲われた。そのため、他の船には走り負け、ただ走らせるだけでは勝てないという状況となってしまった。しかし、さすが経験豊富なペアなだけあり、スタートにおいて厳しいところをついていくなどヨットで走り負けてもレースでは負けない素晴らしいレース展開を行った。

最終日は風がなかったためレースはなく、２位と２点差という接戦で逃げ切り、西医体を締めくくることができた。470クラスで集中力の持続やスナイプクラスでの諦めない心が今回の勝利に貢献したのでないかと思われる。

今回勝つことができたのはもちろん選手の努力だけではない。練習の手伝いをしてくれたマネージャーの皆、夏の練習では体調を崩すものが出るなど本当に過酷な環境であったにもかかわらず、練習に付き合ってくれて本当に感謝している。OBの皆様には２年前にヨットを買いたいといったワガママを聞いてくださった上、ハーバーを見に来てくださり、練習に付き合っていただいた。そして、顧問の日下先生には、諦めない心や自信をご教示して下さり、本当に励みとなった。最後に、なんと言ってもこの香川大学が私達を支えてくれ、自由に活動ができたことにより今の私達があると思っている。本当にこの香川大学に入学できてよかった。今の環境を作ってくださった皆様に感謝してもしきれない。

スタートにおいていい位置を狙うスナイプ級（31108）
５年斎藤と３年岡本

本レース前日のプラクティスレースにて疾走する
国際470級５年木村と４年大和

医学部長に優勝報告

先頭をキープしている国際470級（4656）
５年木村と４年大和

第71回西日本医科学生総合体育大会　ヨット競技　総合成績

	470	snipe	総合		順位
香川大学	7	23	30		1
京都大学	10	22	32		2
兵庫医科大学	14	26	40		3
京都府立医科大学	28	14	42		4
浜松医科大学	24	21	45		5
宮崎大学	34	16	50		6
和歌山県立医科大学	41	16	57		7
広島大学	28	33	61		8
神戸大学	27	38	65		9
佐賀大学	52	49	101		10
滋賀医科大学	68	35	103		11
高知大学	63	50	113		12
産業医科大学	41	75	116		13
大阪医科大学	57	65	122		14
金沢医科大学	60	69	129		15
川崎医科大学	85	67	152		16
関西医科大学		61	61		

部員皆でニコニコの集合写真

陸上競技部活動報告　―大会における活躍―

3年　宮川　友結

5月9日　大阪府、服部緑地陸上競技場
関西医科学生対抗陸上競技選手権大会
三段跳 中村仁選手 14m11（＋2.3）　優勝
400m決勝 堤千紗選手1′00″46 優勝
走高跳決勝 堤千紗選手 1m49 優勝
女子トラックの部、フィールドの部　優勝
女子総合優勝

8月8、10日　大阪府、ヤンマースタジアム長居
西日本医学科体育大会
三段跳 中村仁選手 14m57（＋0.1）優勝
400m 堤千紗選手　57：90 優勝
400mH決勝 堤千紗選手 1′03″19 優勝
４×400mR女子　堤千紗選手、大谷桃香選手、花野智苗選手、吉麻里江選手　大会新記録、優勝
女子トラック部門　優勝、女子総合準優勝
大会最優秀選手として、堤千紗選手が選出されました。

9月16日　奈良県、ならでんフィールド
関西医歯薬科対校陸上競技大会
400m決勝　堤千紗（４）　58″　87　優勝
フィールド部門優勝
女子総合３位

●西日本医学科体育大会
走り終わった後の堤選手と大会最優秀選手として表彰された時の掲示板（↑）

大会については、以上です。

我々陸上競技部は、選手・マネージャーだけでなく健康部門というものが存在し、総勢45名が日々健康増進に努めています。

西日本医学科体育大会には部員全員で参加し、出場選手を応援しました。

選手にとって、応援してくれる仲間が沢山いることほど心強いものはありません。多くの卒業された先輩方も、観戦に大阪まで足を運んでくださいました。本当にありがとうございました。

●ヤンマースタジアム長居での集合写真

●関西医科学生対抗陸上競技選手権大会
服部緑地陸上競技場での集合写真

●４×400mR女子大会記録を
塗り替えたリレーメンバー

●三段跳で優勝した
中村選手

●関西医歯薬科対校陸上競技大会
大会前日に訪れた東大寺

連覇の快挙！

「力泳」

4年　梶　明日香

2019西コメディカル。部旗を持って。

私たち水泳部は現在、12名の新入部員を含む57名となり、医学部の中でも大きな部活の一つとなっています。練習は毎週水曜と土曜に行っており、シーズンである五月から九月は学校のプールで合練、シーズン外では高松市内の市民プールで自主練を行っております。プレイヤーのなかには幼少期から大学生までずっと水泳をしてきた経験者から、完全な初心者まで泳力にかなり差がありますが、幅広い泳力差でも各々のレベルにあった練習ができるよう、四チームに分かれて切磋琢磨しております。初心者向け、水泳部の健康部門の二つ名をもつイルカコース、イルカ卒もう少し頑張れるという方向けのトビウオコース、水泳部の中堅層を支えるコバンザメコース、西医体・西コメディカルでも入賞者を出しているガチ勢の集まり・ギョライコースと幅広い泳力をカバーしており、互いに励まし合いながら練習に取り組んでいます。そんなプレイヤーの練習を支えてくれているのが、マネージャーさんです。タイム取りやドリンクの準備、メニュー説明からスタート出しまで、プレイヤーの周りのことはなんでもマネージャーさんがしてくださるので、我々プレイヤーは泳ぐことに集中できています。

三月末の春合宿から始まる水泳部のシーズンは五月に行われる四国大会が第一関門となります。香川・愛媛・高知の医学部水泳部と徳島大学水泳部が集まり、新入部員のお披露目を兼ねた交流戦を行います。六月に行われる中四医系では現時点での選手の仕上がりや出場種目の読みあいなど、レベルの高い戦いが行われ、西医体西コメの予選会とも呼ばれています。八月には夏合宿が行われ、三日間かけて夏の大舞台に向け最終追い込み、待ちに待った西医体・西コメでそれぞれの目標を胸に試合に臨みます。九月に入るとOB戦や香川大学本学水泳部・香川高専・高松高専があり、卒業された先輩方やなじみある他校の選手とレースを楽しみ、一夏の幕が閉じます。各大学正式選手は種目につき二名までという制限はあるものの、初心者経験者に関わらず全員が各々希望する種目に出場でき、公式記録を残せるため、全員が試合に出られることも選手のやりがいにつながっています。

幼稚園の頃から水泳をしてきた私は、特にやめる理由もなく泳ぐことは相変わらず好きだからというあっさりした理由で水泳部への入部を決めました。スイミングスクールでしか練習する機会がなかった私は、マネージャーさんがいる・先輩がメニューを作る・みんなで声出しするといった「部活動」という雰囲気に圧倒され、同時にとても惹かれました。優しくて速くて尊敬できる先輩と愉快な同期に恵まれ、楽しく切磋琢磨し合った一年の夏、中四国大会・西医体ともに個人種目では大会新記録で優勝、リレーでもメダルを取ることができました。これを機に私の名前だけが一人歩きし、怪物だゴリラだと噂に尾ひれがついたり、実在しない人物だとまで言われたりしたこともありますが、振り返るといい思い出です。二年、三年の夏も個人での連覇、先輩方や新しく入った期待の新人と組んだリレーで決勝に進出するなど充実した結果を残すことができました。そして幹部学年として挑んだ四年の夏、自分がメニューを組み立てる立場になり今まで考えたこともなかったたくさんの困難にもぶつかりながら練習を重ねました。四年ともなると高校時代のころのようにがむしゃらに泳ぐ練習は体力的に厳しくなり、いかに効率よく練習を組み立てるか、先輩にアドバイスをいただきつつ試行錯誤し悩む日もありました。満を持して挑んだ西医体では、毎年タイム差を詰めてくる西日本のライバルに怯えつつも、無事勝利することができました。

自分がここまでのびのびと水泳を続けられているのは、いつも優しく道を切り開いてくださる先輩、水泳一筋だった私にいろいろな楽しみを教えてくれた同期、まっすぐに慕ってくれる後輩、常に選手の最善を考えフォローしてくれるマネージャーさん、喜びも困難も共有してくれた家族の支えがあってこそだと思っています。確かに水泳という競技は、飛び込み台に立った瞬間からゴールタッチする瞬間までは自分だけしかいない孤独なスポーツです。ですが、そこに至るまでの過程は多くの仲間とともに競い励まし合って、一緒に作り上げる立派なチームスポーツでもあります。一人で泳ぐことしか知らなかった私に、仲間と泳ぐ楽しみを教えてくれた「香川大学医学部水泳部」というチームに少しでも恩返しできたらなという気持ちでこれからも練習に励んでいこうと思っています。躍進し続ける水泳部をこれからも見守っていただけると幸いです。

2019西医体200M個人メドレー決勝

追　悼

田邉正忠先生を偲んで

香川大学医学部放射線医学講座
西山　佳宏（平成２年卒・５期生）

田邉正忠先生は去る令和元年９月３日、ご家族の見守る中、静かに息を引き取られました。享年87歳の御生涯でした。

田邉先生は昭和39年に岡山大学大学院医学研究科を修了後、岡山大学医学部附属病院助手、講師、助教授をつとめられた後、昭和57年に香川医科大学医学部教授として着任され、平成９年までの15年間にわたり、放射線医学講座の教授をつとめました。平成９年に香川医科大学副学長・病院長、平成12年に香川医科大学学長に就任しました。香川医科大学などにおける長年の学生教育、研究活動、そして地域医療への貢献に対するご功績に対し、平成27年秋の叙勲を受賞されました。また、かがわ長寿大学の名誉学長として、高齢者の生きがいと健康づくりなど長寿社会対策にも貢献されました。

昭和57年の香川医科大学の創設期には田邉先生、大川元臣先生など７名の放射線科医で、田邉先生がよく言われる「七人の侍」で始まりました。その後、医局員は増加し、40名を超える医局にまで成長しました。私は平成２年に香川医科大学を卒業しました。学生時代から「おれについてこい」といった田邉先生の統率力、親分肌の姿にあこがれ、放射線医学講座に入局しました。私を含め多くの放射線科医を育成し、地域医療レベルとりわけ放射線診療レベルを高められた功績は非常に大きいです。

入局後は多くのことを経験させていただきました。先生の専門は放射線医学、特に核医学で、私は先生の直系の弟子として核医学を専門にして多くのことを学ばせていただきました。香川医科大学の大学院生の頃、私は動物実験の経験がほとんど無いにもかかわらず、何度か先生と一緒に動物実験が行えたこと、一生の宝です。また、放射線医学総合研究所や大阪市立大学など香川医科大学では経験できないような放射線医学の基礎を勉強させていただきました。そして、国立大学では11番目、中国・四国地方では初めてサイクロトロンとPETの経験ができたのも、先生のおかげで、現在の私があります。先生は私が海外での留学をためらっていたところ、留学する勇気とその背中を押していただきました。貴重な経験ができ、同時に医局員が海外留学できる機会を設ける意義を教えていただきました。本当にありがとうございました。

先生には厳しく指導されたことが多かったです。しかし、科研費の申請で出来上がった書類を見ていただいたときに、「うまく書けています」という言葉をいただき、その申請書が科研費に採択された時は本当にうれしかったです。

北米放射線学会や米国核医学会などの国際学会に田邉先生と一緒に参加させていただき、本当に楽しかったです。田邉先生は多くの先生方とお知り合いで、またご紹介いただきました。学会に行く楽しみを教えていただくと同時に、学会発表で終わらずに論文作成を指導されました。最近では私共の教室員が国際学会でYoung Investigator Award等を獲得したことを先生に報告すると、非常に喜んでいただき、そして教室員を励まされました。

先生と初めてお目にかかったのは香川医科大学のクラブ活動・ラグビー部の顧問とその学生という立場でした。クラブ活動で初めて先生にお会いして、挨拶の時に先生がお好きな日本酒を注がせていただきましたが、私の手が緊張で震えていたのを、やさしく「どうした」と声をかけてくれたことを思い出します。今でも、お酒を注ぐときは私の背筋が伸びる思いです。先生が築かれた放射線医学講座を引き継ぎましたが、残された医局員が放射線診療への貢献を引き続き行うことをお誓いいたします。

35年あまりの公私にわたるご指導に感謝しつつ田邉先生のご冥福をお祈りいたします。

杉田英樹先生（平成元年卒・４期生）を偲んで

～生島の奇跡～

松本　義人（平成元年卒・４期生）

杉田君と初めて言葉を交わしたのは昭和58年４月でした。香川医科大学に入学し、部活動を決めるために野球場に行ったとき、杉田君も来ていました。自分はピッチャー志望であり、ストレートは速く、カーブ、スライダー、シュートなども操れるんだ！と高校野球部出身の私に熱く語ってきました（心の中で剣道部出身だろ～、見た目もキャッチャーじゃねえか！）。結局、杉田君も僕も、あと米田君の３人で野球部に入部しました。弱体野球部でしたので３人ともすぐにレギューラーになりましたが、背番号は大きく３人とも20番台でした。当時、ジャイアンツの新人の槇原、駒田、吉村の50番トリオが華々しい活躍をしていましたが、我々も他大学から香川医大の20番トリオには注意しろ、と言われるようになりました。とは言っても西医体、中国四国大会ではコールド負けが続いていましたが、ついに練習、努力の成果が４年生になった昭和61年５月の高松市生島町の県営野球場での中国四国大会で結実しました。１回戦は不戦勝で２回戦の初戦、鳥取大学に延長11回サヨナラ勝ち、杉田投手完投でした。翌日の準決勝は徳島大学でしたが、これも延長11回サヨナラ勝ち、杉田投手完投でした。決勝戦は同日、広島大学でした。当時の広島大学は西医体でも毎年ベスト４に入り、広島東洋カープにテスト生合格していた選手などを擁する強力打線が有名でした。２日間で22回を投げ切り、30分のインターバル後の決勝戦を前にさすがの杉田君も、「次はマッチー（私の呼び名です）、投げて」と。トーナメント戦の公式戦はそれまでは勝ったことのなかった我々は、エース杉田投手ひとりで十分で、公式戦に先発したことのない私も腹をくくり、ブルペンでウォーミングアップをしていました。そこへ杉田君がやってきて、「やっぱり、いけるところまでいってみるわ～」と言ってくれ、正直ほっとしたことを覚えています。決勝戦も杉田投手、完投で５-０で勝利、バケモン杉田を印象付け、公式戦初勝利から優勝まで突っ走ってしまいました。サッカー日本代表がブラジルに勝利した「マイアミの奇跡」が語り継がれていますが、それ以上の我々の「生島の奇跡」が、杉田君の２日間で31回投げ切る強靭な体力、精神力で成し遂げられてしまいました。その３試合ともベンチには奥様も当時はマネージャーとして応援してくれており、優勝と生涯の伴侶も手中にしていたのです。香川医大を卒業し、医者に成った後も杉田君とは野球部OBチーム（オールメッズ）、医師会野球部チームなどで昨年まで一緒にプレーもし、大学内医局対抗野球大会では整形外科対脳神経外科で何度も対戦もしました。投手としても打者としても年齢的な衰えの速い私と比べて、杉田君は50歳を過ぎても素晴らしいピッチング、打力を維持していました。平成28年秋の高松市医師会野球部での大会（三師会という年に１度の歯科医師会、薬剤師会との対抗戦）でも先発した杉田君は歯科医師会相手にノーヒットノーランを達成しバケモン杉田を印象付けました。翌年の同大会に激やせし、ニット帽をかぶって現れた杉田君には驚かされましたが、「酒の飲み過ぎで膵炎になったんよ～」と。私も脳外科開業医ですが、医者ですのですぐに察しはつきました。平成30年３月10日、杉田君の闘病生活が半年以上が過ぎたころ、「生島の奇跡」メンバーに事情を説明し、広島、東京から高松へ集まってもらいました。杉田君にも、とにかく「生島の奇跡」など、昔話をしようとだけ告げ、出てきてもらいました。「明日、ゴルフだから、１次会で帰るよ！」ということで宴会は始まりましたが、２次会（香川県内の同級生に集まってもらっていました）でも、素晴らしいアルコールの飲みっぷり、相変わらずの忖度という言葉を知らないビッグマウスでした。そんな姿を見て、心の中で「彼なら、また、奇跡をおこすかもしれないなあ」と祈りと楽観の混じるような思いでした。令和元年７月３日、訃報が届いてしまいました。香川県済生会病院副院長兼整形外科部長として、亡くなる直前まで診療し、「自分の持っている知識、手術テクニックを後輩に教えるんだ！」と公言し、実行していました。

今、この追悼文を書いている翌日（10月22日）が令和元年の三師会野球大会です。いまだに杉田君が逝ってしまったことの実感がなく、ひょっこりとユニホーム姿で現れ、また、素晴らしいピッチングをしてくれるんじゃないかと思ってしまいます。

２列目向かって左端が杉田先生、
１列目座っている左が筆者、右が米田先生

３代目讃樹會関東支部長　伊藤理先生（昭和63年卒・３期生）を想う

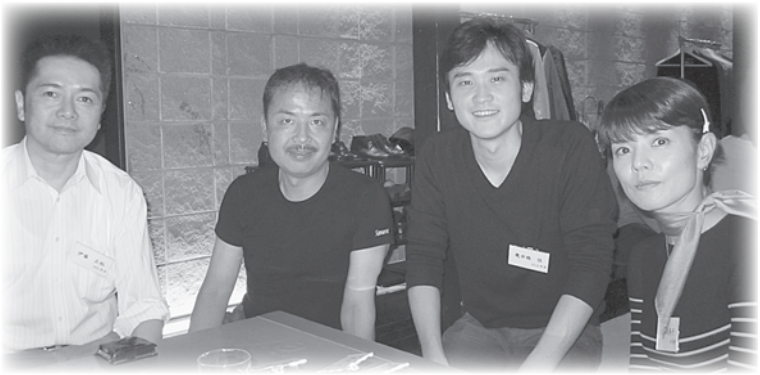
伊藤　正裕（昭和62年卒・２期生）

伊藤理先生（３期生）が2019年11月29日に10年に及ぶ闘病人生を経て逝かれた。Artistでもある理先生らしく、お通夜の式場にはご本人の大好きだったクイーンがBGMで流れていた。とても安らかな顔をされていた。お棺の傍らにはご夫人の美奈子先生（９期生）。深い悲しみの中にありながらも、夫の介護をやりきったという穏やかな表情をされていた。

理先生とは学年も所属クラブも異なっていたため、お互いに認識はしていたものの学生時代には言葉を交わした記憶はほとんどない。言葉を交わすようになったのは、お互いが母校の教官となってから。彼の患者として形成外科手術を受けることになったのがきっかけである。学生時代に思い描いていたイメージとは異なり、とても素朴で優しい御仁であることに初めて気づいた。

お互い高松でずっと暮らすつもりでいたが、やがて、両者とも20年以上の讃岐生活に終止符を打つ流れとなり、関東で再び会うようになった。当時は讃樹會関東支部会の立ち上げの時期であり、落ち着いたところで理先生に支部長を引き受けてもらった。写真は支部長引継ぎ前の関東支部会の時のものである。彼の支部長としての功績のひとつに支部会開催を毎年同じ時期同じ場所に固定化したことがあげられる。それまでは、都内であれこれ毎年お店を変えながらどこかの晩に集まってはワイワイやる会であったが、理先生が支部長になってから、毎年11月の日曜日、横浜の港が目前に広がる瀟洒なホテルの一室で、海と船と公園の緑を眺めながらランチをする格調高い集いへと変貌し、参加者ひとりひとりの近況をじっくり拝聴できる時空がそこに創出された。これが恒例化してくると、「とにかく11月日曜日は横浜で」がだんだん脳に染み込んできた。理先生は、経年的に運動機能が衰えていく中にあっても最期まで支部長を務めてくれた。横にはいつも美奈子先生がついていた。美奈子先生は支部会での近況報告でも明るく夫である理先生との日常を語ってくれた。リハビリテーション医療の重要性への深い認識、車椅子での移動にとって、住宅の一般的なドアがとても不便であり、自動ドアがどれだけありがたいものか、また、介護に明け暮れてただ重苦しくなるのでなく介護者が趣味など楽しめる時間も持つことの大切さなど、どれも説得力のある話であった。今の医学生とは異なり、我々の時代にはリハビリテーション医学を独立した専門領域として教育を全く受けてこなかった。しかし、現場に出てみると、生涯に渡ってハンディキャップを背負いつつ何とか自立した生活に近づこうとしている人々が、高齢者のみならず、子どもから働き盛りの世代までどれだけ多いことか。ただし、自分自身、家族または身近な人間が実際にこのような状況にならない限り、なかなか障害者の目線で物事を見ることは難しい。生前の理先生にお会いしたのは2018年11月の関東支部会が最後となってしまった・・・。もう会えないかと思うとただただ切ないが、内山順造先生（６期生）が後任支部長として理先生の志を引き継いでくれた。

冒頭で「Artistでもある理先生」と記した。彼の美術の才能は同級生なら誰もがご存知のことと思う。ご存命のご尊父は彫刻家（筑波大学名誉教授）であり、弟さんもイタリアで活躍する芸術家である。彼も医学を志してなかったら、きっとその道に進んでいたであろうと美奈子夫人から伺った。彼は母校の形成外科学講座に入局した最初の同窓生である。実はこれが凄いことなのである。当時は形成外科学を独立した講座として持っている医学部は全国的にほとんどなく、中四国地方で初めて形成外科学講座が開講された大学が香川医大だった。その初代教授の秦維郎先生の形成外科手術はまさに神がかっていた。患者も全国から集まり、教授の実際の手術および講義スライドを見ると、患者の身体にいろんなデザインの線を描くところから始まる芸術かマジックに思えて、その発想と技術は、医療というよりは、常人ではとても近寄ることができない、センスある者だけが踏み込めるArtの世界といえた。当時医学生であった我々は、秦教授の技術が至極素晴らしいというのはよく理解できたのだが、その領域に対して皆明らかに引き気味で誰も入局しなかった。そこに果敢にも乗り込んでいった最初の同窓が彼だったのである。高松から横浜に拠点を移し活躍する彼の数々の形成外科手術スライド・動画を見る機会があり知ることとなるが、手術のデザインやデッサン、そしてテクニックは、あの学生時代に感じた「凡人ではとても入り込めない極みの世界」を再び見せつけられた気がした。讃樹會はひとりの偉大なMedical Artistを失った。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。合掌



2011年関東支部会にて　左から二人目が伊藤理先生（３期生）
右端がご夫人の美奈子先生（９期生）

伊藤理先生を偲んで

清元　秀泰（昭和63年卒・３期生）

逝ってしまった親友、伊藤　理（おさむ）に捧ぐ

それはとても弱々しい声だった。

私が東北大学の教授に就任して間もない頃、教授室に電話をかけてきてくれた君。何十年振りかに話す懐かしい昔話もそぞろに、君は自身がALS（筋委縮性側索硬化症）だと告白してくれた。電話の内容は、東北大学病院の神経内科で行われている治験に参加できないか、との打診だった。神経難病の研究で有名な東北大学病院では、神経賦活作用のある肝細胞増殖因子（HGF）を髄腔中に持続投与する埋め込み型ポンプの治験が行われていた。結局、神経内科の治験エントリーは終了しており、君はこの治験に参加することができなかった。セカンドオピニオンとして相談した東北大学神経内科のつれない対応にも、動きにくい表情筋を動かして笑顔を作ってくれた君。私は杖をつきながら仙台を後にする君を見送る事しかできなかった。

君と私は、昭和57年４月、香川医科大学の３期生として入学した同期。大学裏の三階建てワンルーム・アパートの炭山ハイツ（現在は別の名前）の同じフロアの住人となったのが昭和57年（1982年）４月。現役で入学した関西人の私と、関東で生まれ育ち、早稲田の文学部中退で二浪して入学した大人の君とは、環境も性格も全く違うのになぜか気が合った。いつも関西弁でまくし立てるように喋る私を、傍らで温かく見守ってくれてた。時々、辛辣なアドバイスもくれる君は、優しい兄貴のような存在だった。

我々にとって、四国は未知のワンダーランド。入学当初は原チャリで三木町の農道を走り、ワクワクしながら探検した。アパートに帰れば毎晩、酒盛り。土浦一高ではヨット部に所属した君は、国体出場を目指して必死に練習に明け暮れたと。脇目も振らず、日々、霞ケ浦での厳しい練習によく耐えたと。早稲田の二文（第二文学部）を中退して香川医大に入学した理由は、浪人時代にあこがれていた女性が香川医大に進学したからと、純なところを告白。事実、その後、その憧れの女性に告白するもあえなく轟沈。しばらくは引きずっていたようだけれど、同じアパートの田中淳一さんの影響もあって、君はテニス部に入部し、ひたすら練習に明け暮れた。真っ黒な顔に白い歯、それが君のトレードマークでした。

バイトや運動部の活動に明け暮れていた我々の最大の試練は進級。試験が近づくと皆で手分けして、まじめな学生のノートを借りまくり、借りてきては宮脇書店でコピー。君は学籍番号の近い池上ノート（当時、上物と言われ、入手困難）を入手してくれた。優しい君は私の分までコピーしてくれた。当の私は、コピーを集めて自己満足に陥り、結局は試験直前まで徹夜で一緒に勉強。明け方、眠くなってくると君とエリエールという24時間営業のファミレスで、コーヒーを何杯もお代わり。ずぼらな私が留年もせず、無事に進級できたのは、君がいてくれたから。

試験が終わって進級が決まったある年の春、みんなで道後温泉にドライブ旅行に。この小旅行は今も鮮明に記憶に残っています。まだ浪人を続けていた友人の入江君を励ます目的もあって、奥道後温泉のジャングル風呂に。お風呂上りに、ホテルのロビーでくつろいでいた見知らぬ女子をナンパ。そんな時でも、はにかみながら場を盛り上げていた君は、まさにナンパチームの要でした。

向かって左端から伊藤理先生、山口先生、宮國先生、入江先生。座っているのが筆者。山口先生は伊藤先生の土浦一高時代の同級生で、現在日本大学板橋病院泌尿器科の医師、宮國先生は伊藤先生の代々木ゼミナール時代の友人で、現在沖縄県で歯科医をされています。写真提供は入江琢也先生。
※プライバシーに配慮し女性の顔は一部加工させていただいています。

基礎医学から臨床医学へとカリキュラムが進む中で、君の才能は開花しました。芸術一家の長男として生まれ、絵が上手だった君は、趣味でデッサン画をスケッチブックに描いていた。人物も静物も丁寧で繊細、微妙なしぐさまでよく観察する君。芸術家としても大成したかもしれません。手先があまり器用でない私は、君の能力を見て、自分は外科には向かないと早々に内科を志しました。一方、君は持ち前の美的センスを活かして、母校の形成外科に入局。後進の指導にも尽力し、香川大学医学部附属病院の形成外科講師、准教授と大活躍。さらに、より多くの症例を求めて香川から横浜へ。横浜市立みなと赤十字病院の形成外科部長として多くの人の夢と希望を叶える仕事をしました。

母校の香川大学から東北大学に異動した私と横浜の君とは、専門も違えば、住む場所も違うため、卒業後、互いにどんどん疎遠になり、いつしか顔を合わせることもなくなってしまった。まさか、君の不治の病が二人の再会となるのも、不思議な縁だと思います。

十数年ぶりの再会は2013年の春。君は一人で、横浜から仙台にやってきてくれた。久しぶりに会った君は、杖を突いて私の研究室に。横浜からの道中、日本のバリアフリー化がいかに遅れているかを熱く語ってくれました。私は震災復興事業で慌ただしくしている最中でしたが、友あり遠方より来る。嬉しくて教授室で久しぶりにゆっくりと話をしました。自身のALSの発症、病状とその進行。これまでの経過と様々な治療への考えを聞きました。私の方が悲観的になるくらい辛い話でしたが、君は気丈夫で、この難病と正面から闘っていました。先進治療にも積極的で、東北大学で駄目なら英国に行って、最先端治療を受けたいという強い希望も持っていました。

そんな厳しい病状でありながら、君は同窓会関東支部会の会長を献身的に務めてくれた。君の歩行補助は杖から、愛妻の美奈子さんが押す車椅子となったが、母校や同窓に対する愛情はより強くなった。関東には縁のない私でしたが、どんなに震災復興特別会計の執行官として多忙な時期でも、何とか予定を確保して、同窓会には欠かさず駆け付けました。君の母校を盛り上げようとする熱意にほだされ、皆で分担して関東在住に限らず連絡先のわかる同窓生に声をかけました。みんなで一丸となって、関東支部会を盛り上げようと奔走した結果、一年に一回の横浜での関東支部会の参加者は、北は青森から南は沖縄まで拡大し、集う同窓の数が年ごとに増えました。横浜に集まるたくさんの同窓。懐かしい仲間の談笑する声や笑顔に、君もやりがいを感じてくれたと思います。まさに、これが伊藤理のなせる業であり、これが君の人徳です。

2016年関東支部会

それでも、君の病気は無情にも少しずつ進行し、運動能力を奪っていった。年一の支部会でしか会わない私たちにも君のALSの進行は顕著で、携帯電話を持つことも、発語することも難しくなってきた。ある日、君は急に私に電話をかけてきた。「関東支部会の会長を代わってくれ」、と振り絞るような声。その時、私は会長に就任することを断った。「オサムは最後まで会長をしてくれ。俺は会長代行で支えるから」と。大きく発展してきた関東支部会、会長はどんな状態でも伊藤理、君でしかありえない。そして、関東支部会を東日本支部会、もっと拡大して日本中、同窓ならば全国の誰でも参加できる会にしよう、と話しました。

当初は杖を使って自力で歩いていた君は、車椅子生活となり、そして、姿勢保持も難しくなった。食べ物が食べづらくなり、美奈子さんの介助なければ何もできなくなった。どんどん痩せていき、言葉も多くは喋れなくなった。医者だからこそ、ALSという病気の進行に対する恐怖も強かったはずだ。衰えていく自分の身体を、気力を振り絞って維持していたのだと思う。そして、君を介助する奥様の美奈子さんのご苦労は、我々の想像を絶するものだったと思います。

美奈子さん、わが友、オサムを愛し、献身的に支えてくれてありがとう。最後まで親友のわがままに付き合ってくれて、看取ってくれてありがとう。今、内山会長のもと、オサムの思いの詰まった関東支部会が盛会になったのも、伊藤美奈子さんの深い愛があってのことだと思います。

オサムが愛した、みなと横浜。これからもオサムの遺志を受け継いで、当面の間、支部会は横浜のホテルニューグランドで開催してください。そして、これからも内山会長のもと支部会が盛会でありますことを祈念しています。

友よ、安らかに眠れ。合掌

///// 第６回 /////　関連病院紹介

～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3200人を超え、約950名が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後30年以上が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2019年12月11日11：00からおよそ１時間、高松赤十字病院にお伺いし、網谷良一院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長　濱本龍七郎

高松赤十字病院の紹介

高松赤十字病院　院長　網谷　良一

病院正面完成図　本館北タワー（右側）と本館（左側）

当院の概要

当院は明治40年（1907年）６月に地元香川県などからの要望により日本赤十字社香川支部病院として現在地に設立されました。全国91か所の赤十字病院の中でも６番目に長い歴史を有する病院で、当初内科、外科、眼科、産婦人科の４科114床の病院としてスタートし、その後次第に規模を拡大し現在に至っています。この間、昭和20年７月の戦災による焼失後の一時期を除き、今日まで変わらず現在地で医療を継続してきました。

令和２年１月時点では、許可病床576床のうち病院整備事業中の影響で実質497床で稼働しています。その中には救急病床10床、ICU/HCU 16床、NICU ３床、BCR 16床が含まれます。なお令和２年４月の新棟（本館北タワー）稼働後には500有余床での運用を予定しています。26診療科で構成され、施設認定等の主なものとしては地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センター、救急告示病院（二次救急輪番病院）、地域災害拠点病院、へき地医療拠点病院、脳死下臓器提供施設、骨髄移植施設、腎臓移植施設、初期臨床研修指定病院（基幹型）、新専門医制度の基幹研修施設（内科領域、外科領域）、DPC特定病院等が挙げられます。研修医を含む常勤の医師141名、看護師535名をはじめ1100名を超える職員が業務に従事しています。施設面では本館、本館北タワー（令和２年４月稼働）、中央診療棟、南館、管理棟、立体駐車場の他に、病院に近接して研修センター（大・中研修室２室を含む研修フロア、研修医宿舎14室、見学者・実習生用宿舎３室を有する）と最大80人収容規模の院内保育所を設けています。なお南館と管理棟は病院整備事業の完了とともに、最終的に解体し跡地に駐車スペースを設ける計画です。

当院の担うべき役割と診療内容の特徴

当院は稼働病床を全て高度急性期病床または急性期病床として運用しており、地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院をはじめ様々な施設認定を受けていることからも分かるように、急性期・高度急性期医療、高度専門的医療、災害医療並びに先進医療に重点を置いて業務を遂行することが当院に課された責務と認識しており、それに応えるべく職員は日々研鑽に努めています。当院の各診療科・部門は香川県の医療を牽引する意気込みで、当院の理念である「“人道・博愛”の赤十字精神に基づき、地域の皆様に信頼される、安全で質の高い医療の実践」に真摯に取り組んでいますが、ここではその中から当院に特徴的な幾つかの例を紹介します。

1．手術支援ロボット“ダヴィンチ”の早期導入と対象拡大

当院では平成25年６月に香川県内では初めて“ダヴィンチSi”を泌尿器科の前立腺がん手術に導入しました。その後着実に件数を伸ばし、中四国では大学病院を含めてトップを争う手術実績を上げています。その後前立腺がんに加えて腎がん部分摘出術、膀胱がんの膀胱全摘術にも対象を拡大し、さらには消化器外科の胃がん、直腸がん、胸部乳腺外科の肺がんにも対象を広げています。なお平成30年12月には“ダヴィンチSi”から最新モデル“ダヴィンチXi”に更新しました。

2．血液悪性疾患を主な対象とした無菌室・無菌エリアの整備

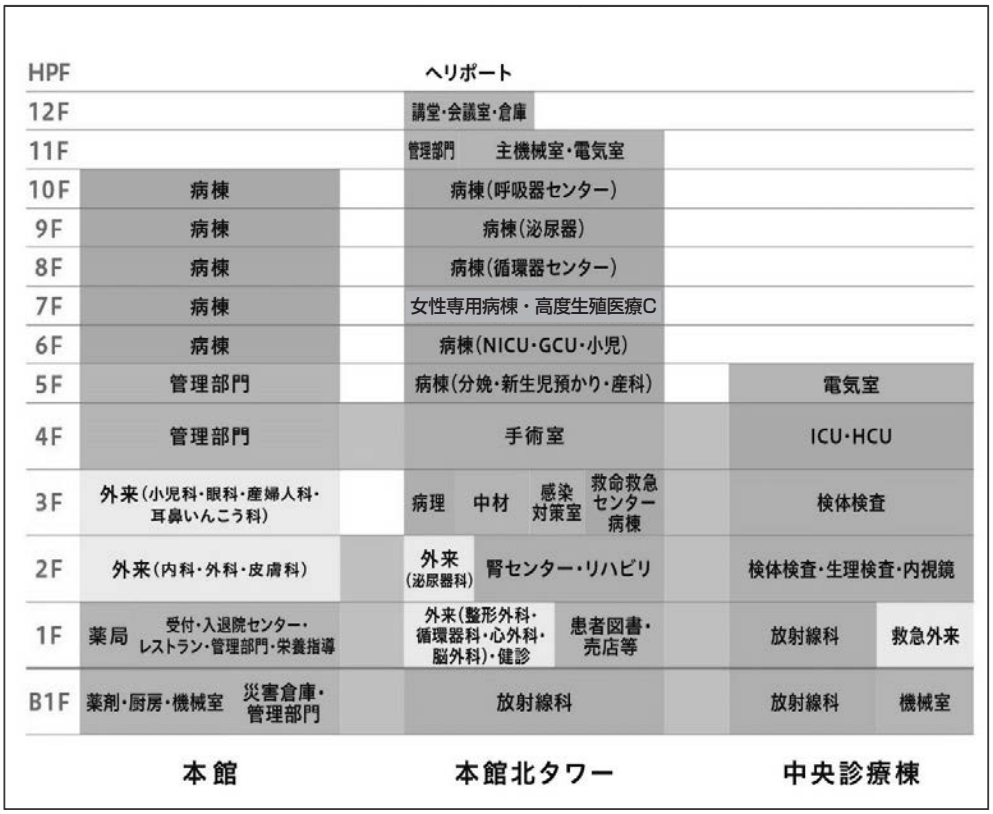
平成28年11月に本館10階病棟のリニューアルを行い、無菌室16室を設置するとともに10階フロアの約半分のスペース（無菌室14室、廊下、デイルームを含む）を無菌エリアに整備しました。主に血液内科の悪性疾患患者さんを対象にしていますが、疾患の性質上どうしても入院期間が長くなる中で、クリーンな環境でのリハビリテーションも可能になるとともに日常の活動範囲も広がることから、入院生活のストレス軽減にも役立つことを期待しています。

3．血管内処置、血管内治療の推進を目指した血管造影室の増設

本館北タワーには手術室エリアに血管造影装置を有するハイブリッド手術室を設置し、地下放射線科区域にIVR-CT装置を設置することにより、既存の中央診療棟の血管造影室２室と合わせて、病院全体では血管造影室が４室になります。循環器内科、心臓血管外科によるTAVI、PCI、アブレーション等はもとより、脳神経外科、放射線科（IVR）、消化器内科（肝疾患）などでの血管内検査・処置、血管内治療に十分対応できる基盤が整備出来たと考えています。

4．「高度生殖医療センター」（“男性・女性不妊治療”“妊孕性温存”）の開設

平成30年４月に女性不妊治療の専門医の着任とともに「生殖医療センター」を立ち上げ、本格的な生殖医療に対応できる体制の整備に努めてきました。一昨年から既存施設で女性不妊治療がスタートしていますが、本館北タワーの完成によって７階女性フロアの一画に専用エリアを整備し、「高度生殖医療センター」として本格始動します。当院では長年にわたり泌尿器科で“男性不妊治療”が精力的に実施されてきた歴史と顕著な実績があり、今回産婦人科の“女性不妊治療”と緊密に連携する体制が整備できたことで、香川県内の総合病院では初めて男女一体となった本格的な不妊治療の体制を構築することが出来ました。また合わせて若年がん患者を主な対象とする“妊孕性温存”の治療も実施しています。これらの“生殖医療”を希望する患者さんを支援する補助金を受けるための施設認定も既に得ています。



令和２年４月～　高松赤十字病院全体階層構成図

新棟（本館北タワー）のご紹介

令和２年４月には新棟(本館北タワー)が稼働します。当院では最も大きな建物で、診療機能の中枢を担うものになります。免震構造で、地下１階、地上12階、屋上にヘリポートを設置します。階層構成図に示しますように、地階の放射線科区域にはPET-CT、SPECT-CT、IVR-CTのいずれも最新かつ高機能の装置を設置します。またIMRT、動体追跡治療など様々な高精度放射線治療を可能とする最新のリニアックシステムを導入します。１階には健診部門と外来の一部を移設します。２階には腎センター（透析室）とリハビリテーション室をより快適に治療が行えるよう整備します。３階の救命救急病棟は20床を有し、“救命救急センター”の要件を満たすものとなっています。４階にはハイブリッド手術室１室を含む10室の手術室を整備します。５階６階は産科、小児科を含む周産期病棟とします。７階を女性専用フロアとし、婦人科、乳腺外科を中心に女性患者に配慮した病棟運営を行います。最上階12階には最大250人収容の講堂を設けました。講堂に隣接するホワイエは瀬戸内海と点在する島々を見渡すのに絶好の場所です。各種セミナーや講演会などのイベントに活用する予定です。

香川大学医学部、医学部附属病院との連携について

当院で診療にあたっている医師の出身大学は、香川大学はもとより京都大学、徳島大学、岡山大学、愛媛大学、高知大学などきわめて多彩ですが、出身大学には全く関係なく医師相互の連携はきわめて緊密かつ円滑に行われています。初期臨床研修や専門医研修についても当院は多くの大学の連携施設になっており、各大学から医師を受け入れています。とりわけ香川大学からは毎年多くの学外実習の学生と学外研修の研修医が来てくれています。また当院での２年間の初期臨床研修終了後に専門医研修で香川大学にお世話になる医師も少なくありません。当院としましては、関連診療科の医師はもちろん、学生の学外実習、初期臨床研修、専門医研修などで今後とも香川大学との連携をいっそう緊密にしていきたいと考えています。香川大学の同窓会の皆様には今後ともご支援ご協力を宜しくお願い致します。

※前列左より　網谷良一　院長、濱本龍七郎　讃樹會名誉会長、大西宏明　副院長・第一血液内科部長
後列左より
福本哲也　第一血液内科副部長
小野優子　第四放射線科副部長
外山裕子　第二循環器科部長
大山知代　内分泌代謝科部長
瀧波裕之　第二循環器科副部長
外山芳弘　第三放射線科部長

国外留学助成金　留学レポート

メルボルン セントビンセント研究所にて

濵本　有佑
（平成12年卒・15期生）

グレートオーシャンロードの十二使徒

あらためて香川大学医学部医学科同窓会「讃樹會」における国外留学助成金を拝受しましたこと、心より感謝申し上げます。私は2016年１月からオーストラリア、メルボルンのセントビンセント研究所にて、人工皮弁・脂肪弁の研究に携わりました。

【生活】

留学期間が約半年と短く、生活基盤を整えている時間が無かったため、Graduate houseと呼ばれるメルボルン大学の大学院生寮に住む事にしました。朝食・夕食がついており、様々な分野の大学院生・職員と話すことができ良かったと思います。中国、インドネシア、インド、ヨーロッパ、北米等、世界中から優秀な学生が集まっており多様性に富んでいました。自分の日本人英語は棚に上げてですが、各国の英語にそれぞれ特徴があり、慣れるまで（慣れても）聴き取りに非常に苦労していました。メルボルンは世界一住みやすい街と言われており、「卒業して永住権が取れたら家族でオーストラリアに移住する」と言っている人が多かったです。セントビンセント研究所事務長のJennyには留学前も留学中も気にかけて頂き、本当にお世話になりました。ホームパーティーでの際に、Jennyの夫であるTonyに乗せて頂いたクラシックオープンカーが忘れられず、現在マツダのロードスターに乗っています。

【研究】

香川大学では、ウサギの鼡径部にチャンバーと呼ばれるケースを埋入することで組織新生を促し人工皮弁を作成する実験をしていました。そのためAdipose teamに所属し、体外でラットの鼡径部の脂肪弁に血流を模した培養液で灌流する、バイオリアクターの実験を行いました。脂肪組織は血流が乏しいため壊死し易いと考えられていましたが、現在では血管の豊富な組織であるが故、一旦阻血に陥ると容易に壊死に至ることが分かっています。酸素濃度の異なった条件で組織灌流を行い、組織の生存率を比較しました。宿舎から研究所まではカールトン公園内を歩いて通うのですが、研究や臨床のアイデアを考えるのには素晴らしい時間でした。香川大学に戻ってからも実験を続け、讃樹會から頂いた助成金から、組織移植に与える酸素濃度の影響に関する論文を１編発表することができました。

お世話になったJenny とTony

【手術】

研究所の隣にセントビンセント病院があり、実験の空き時間には手術見学も許されていました。手技やルールの違いに、陳腐な言い方ですが“カルチャーショック”を受けました。研修医時代に麻酔科前教授の前川先生から海外の手術室の話を何度も聞かされていましたが、手術の入れ替えが異常に速い上に手術も早く、手術の回転率が全く違っていました。導入のための前室があり、前の手術の抜管中に既に導入準備が始まっています。香川大学でも試験的に導入されていますが、術後回復室があり、早々に抜管してから回復室で待機してから帰室するため、無駄な待ち時間が全くありません。手術に関しては、一見、手術手技は上手ではないのに早く終わる。私が専門にしている頭頸部癌、頭頸部再建に関しては…頸部郭清は極めてさらっと、原発巣は皮膚切開を大きくして切除し易く。迅速病理は行わない。切除･再建中に創部の生食洗浄はしない。「術野の生食洗浄はしないの？」と質問すると、「しなくてもあんまり感染しないよ。洗浄したら出血するから、止血が必要になって手術が遅くなるでしょ？」といった返答でした。我々はベストな（と思われる）手技を積み上げて最終形を作っているように思いますが、セントビンセント病院では手術終了時間から逆算して、終わる手術を選択していたように見えました。誰もができる手術で、学ぶべきところはたくさんありました。

アイデアを求めて歩いたカールトン公園

Morison教授と

日本に帰ってからの自分の手術は格段に洗練されたと思います。また、力を入れる手術はとことん力を入れる。力を入れる手術というのは、症例報告や論文になる手術。目に見える結果（手術時間短縮、業績等）にはベストを尽くすけれど、見えにくい結果（術後瘢痕の美しさ、再発率、局所感染等）にはあまり拘りが無いように見えました。論文・発表につながる症例、時間短縮になる手技、見栄え等、結果の良し悪しよりも時間内に終わる手術を選択する。目に見える結果以外に興味がない。これは研究所も同様であり、オーストラリアの社会全体にもそういった傾向がありました。効率を追求しつつ、適度に力が抜けた社会は、慣れれば「世界一住みやすい街」だと改めて思いました。

【帰国後】

帰国直後より札幌医科大学形成外科にて国内留学という形で２ヵ月間臨床研修を行わせて頂きました。札幌医科大学形成外科は全国のほぼ１/２の小耳症患者が集まっており、肋軟骨移植による耳介形成を日本一行っている施設です。特に研修を行った７～８月は夏休みのため、毎週４件の小耳症手術があり、濃厚な経験を得ることができました。現在、耳介再建は頭頸部再建に次ぐサブスペシャリティとなり、香川大学でも先天性耳介変形、小耳症患者が徐々に増えています。帰国後に同時期に香川大学の小児科や放射線科の先生がメルボルンに留学されていた事を知り、同窓会でのつながりの必要性を痛感しました。

【最後に】

海外留学で得られるものは、医師としても文化的にも得難い経験だと思います。若い同窓生には、留学中の生活を想定して、十分準備をした上で、可能な限り早い時期に留学することをお勧めします。本留学に際して、研究・生活面でたくさんの助言を頂いた田中嘉雄前教授、そして私が不在の間、外来、病棟業務、手術を担って頂いた香川大学形成外科の皆様、多大な援助をしていただいた皆様に深く感謝致します。

Vol.3

It's time to fly

川久保充裕
（平成22年卒・25期生）

▲総２階建てのANA A380　ハワイ・ホノルル空港にて
背景にわずかですがダイアモンドヘッドが見える（左端）

讃樹會の皆様方、こんにちは。平成22年卒、25期生の川久保充裕と申します。ちょうど香川大学と旧香川医科大学が統合した年に入学しており、香川大学医学部の１期生にもあたります。

同期の鈴木裕美先生の推薦を受け、今回「趣味ざんまい」Vol.３を執筆させていただきます。

私を知る人ならば周知の事だと思いますが、私はだいぶ変わった「乗り物オタク」であります。少年時代の「てっちゃん」（鉄道ファン）から始まり、写真へのこだわりが強くなり、カメラワークを追求し始め、中学校で英語を学んで以降、航空無線に興味を持ったところから「ひっちゃん」（飛行機ファン）となり、アマチュア無線も“４級じゃ物足りない！”と３級を取り、ここ数年は航空祭にも顔を出し「みっちゃん」（ミリタリーファン）へと順調に枝葉を広げながら乗り物オタクの階段を登っています。この様に多趣味故に、どの趣味を皆様にお話すれば良いか苦慮しましたが、今回は、現在私が最も熱中している、飛行機の新規就航路線におけるinaugural flight すなわち「初便」

▲これまで搭乗した初便で頂いたステッカー＆搭乗証明証の一部。各都市のステッカーを集めるのも楽しみの一つです。

ANA A380　復路初便 念願の１A席に乗って感無量の筆者

というテーマで筆を進めさせていただきます。

私が「初便」に興味を持ったきっかけは、“数か月先まで空席待ちが続き、予約が取れないマイレージによる特典航空券が、新しく予約開始となる新規就航路線の初便なら取れるかもしれない！”という理論からでした。

2006年、残念ながら現在は休止となっている名古屋-広州初便を皮切りに、これまで数多くの新規就航路線の初便に搭乗してまいりました。当初は、現地で１泊し観光して帰るという事をしていましたが、初便の楽しさを知るにつれ、徐々に初便に往復で乗る事が目的となりました。

2012年ドリームライナーの愛称で知られるBoeing 787の長距離初就航となった羽田-フランクフルト就航初便では、羽田から12時間のフライトでAM６時過ぎにドイツに到着後、５時間の滞在の後、AM11時には復路初便で帰国の途につきました。2017年ANAの最長距離フライトとなった成田-メキシコシティ就航初便においても、メキシコシティ到着後、８時間の市内観光の後、15時間の復路初便で帰国の途につきました。

この様に、ここしばらくは現地滞在時間が24時間を超える事はほぼなく、３～12時間の滞在が当たり前に

なりつつあります。

ここまでで「そんな短時間滞在して何が出来るの？！」「何が楽しいの？！」とお感じになられた先生方もいらっしゃるかもしれませんが、これが楽しいのです。初便イベントを楽しみ、飛行機に“乗る”事が目的なのです。日帰りですから当然預け荷物はなく、着陸してからのベルトコンベアーを前にした荷物待ちはありません。荷物はバックパックにPCとカメラ、現地で使えるSIMカード＋携帯だけです。空港を一歩出たらGoogle mapなどを頼りに街歩きです。メキシコではタコスを食べ、ソカロ広場へ行き、テキーラに呑まれ。シドニーでは遊覧船に乗りオペラハウスを眺め、ハーバーブリッジを歩いて渡り、ボンダイビーチでインド洋の荒波にもまれ。ウィーンでは国立歌劇場へ行き、ホテル・ザッハーとDEMELのザッハトルテを早朝から食べ比べ。いずれも12時間未満の滞在で最大限の観光を満喫しています。入国審査で不審がられ、別室送りになった事も何度かありましたが、もう慣れっこです。

一般的に、この様な弾丸旅行は有償（お金を出して買う）航空券ですと、ほぼ正規料金となりトンデモナイ金額になる為、“マイルでの特典航空券だから出来る、というよりむしろ特典航空券でなければ出来ない”と言った方が正しいかもしれません。

2019年は日本の航空会社で初導入となった（そして、新規製造もエアバスにより打ち切られた為、唯一になってしまいそうな）総二階建飛行機A380の初便に乗り、弾丸ハワイへ行ってまいりました。現地滞在は僅か３時間半！というまさに空港のみの滞在となりましたが、同じ趣味を持つ方々が20～30名程度搭乗しており、記念すべき初便を往復共に一緒にお祝いしました。復路初便（時差の都合で、現地の日時は日本発よりも早い時刻であり、見方によっては本当の初便とも言える！）ではマイラーの最終目標であるファーストクラス。しかも、一般的には直前まで予約が出来ずVIP専用との声もある「1A」席でハワイ弾丸旅行を終える事が出来ました。

この「初便」の趣味を始めてから、行った事が無い国や都市へ“初便搭乗”という名目で行く事が増え、これまで自発的に行く事を考えもしなかった、メキシコやインドにも行く事が出来ました。

ハワイ州知事
デービッド・ユタカ・イゲ氏
(Mr.David Yutaka Ige)

またかつて、この趣味は“自己満足”的な物でしかなく、ただの自慢話にしかならず、普段の仕事には全く活かせないものと感じる事もありました。ところが、内分泌・糖尿病内科医として患者さんと接する中で、ちょっとした旅行の話がきっかけで良好なラポール形成が出来たり、これまでの旅の経験から、旅行へ行く予定の患者さんにアドバイスが出来たりすることがありました。この様な経験から、僅かではありますが仕事に役立つ事もあるのかなと、最近は良い方向に自己解釈をして、「初便」を楽しみにコツコツとマイルを貯める日々を送っております。

初便ならではの有名人との出会い

ANA　平子　裕志　社長

JAL 大西　賢　元社長

元オーストリア首相
セバスティアン・クルツ氏
(Mr. Sebastian Kurz)

2020年は記念すべき東京オリンピック開催年であると同時に、“羽田空港国際線再拡張”の年でもあります。３月以降の新規就航路線も続々と決まっており、今後また新たな出会い、発見を楽しみに「初便」の趣味を満喫していければと考えています。

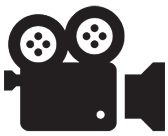
最後になりますが、讃樹會の皆様方におかれましても、大変ご多忙な日々をお過ごしの事とは存じますが、時に本業を忘れ“趣味”を満喫してみてはいかがでしょうか？

皆様方の益々のご活躍を心からご祈念して筆をおかせていただきます。ご拝読ありがとうございました。

「創部ものがたり」

～映画研究会編～
創部からおよそ10年間

香川大学医学部 法医学
木下　博之（平成４年卒・７期生）



映画研究会（以下「映研」）は1983年に当時の先輩方（山田賢治先生、中村洋之先生）（３期生）が立ち上げられたと聞いています。1986年入学の私にとっては、高校の同級生の谷　守通先生に連れられて参加したものの、創部時の詳細は実のところよく分からないのです。

残念なことに、創部当時の記録もほとんど残っておらず、原稿執筆のご依頼をいただいたものの、正直なところ頭を抱えています。が、手許にある資料を探りながら、当時の活動を振りかえりたいと思います。

大学会館２階のサークル共用室（２）を部室として使用し、毎週水曜日にミーテイングと称して部員が集まっていました。当時、水曜日の午後は部活のために授業がない、という今から考えるとのどかな時代でした。運動部と兼部していた部員も多く、部員が最も多く集まるのは年に数回あった飲み会の折だったように記憶しています。当時の顧問（初代）は羽白　洋先生（ドイツ語）にお願いしており、飲み会には、ほぼ必ずご出席いただいていました。ありがとうございます。

活動の多くは個人に委ねられており、オフィシャルな活動としては、大学祭の折に「オールナイト上映会」と称して一晩中講義室で映画のビデオを上映していました。印象に残っているのは、1987年10月の大学祭のことです。ちょうど前夜祭から上映会を行っていましたが、折からの台風の影響で雨が降り続いたため、新川で水害が発生し、朝が来た頃には大学周辺が広範囲に浸水していました。おそらく当時、被害に遭われた方も多かったと思います。

上映会では、劇場用作品のみならず、自主制作ビデオも上映していました。1986年当時、８mmフィルムはすでにビデオテープに取って代わられて姿を消しつつありました。当時、家庭用のビデオの規格はVHSとベータ方式が拮抗しており、自前の機材もなかった当時の映研では、大学会館事務室で貸し出しされていたベータ方式のビデオカメラや照明などの撮影機材を用いての撮影が主でした。また、編集作業は図書館の視聴覚室にあった編集装置や、臨床講座の医局にあったビデオ編集装置をお借りするなど、制作の過程でか

1990年３月

1992年４月

なり苦労があったと聞いています。

1986～1990年頃の制作作品としては、「共通一次パンドラの箱」(1986年)(監督:杉山博之先生(４期生))など数作品あったと思います。その後も田井祐爾先生(７期生)、金西賢治先生(８期生)をはじめ、多くがメガホンを取っています。残念ながらそれら作品の多くは管理が十分でなく、散逸またはベータ方式のビデオのまま、といった状態で、すぐに観られる状態ではないのが残念です。

このように、活動としては結構「ゆるい」映研ですが、「合宿」と称した夏休み旅行を行ったこともあります。1986年は「共通一次パンドラの箱」制作を兼ね、坂手港周辺で小豆島ロケを行っています。1987年は大林宣彦監督の尾道三部作(「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」)の舞台となった広島県尾道市に、1988年は当時のニュース番組の特集で放映されていた高知県の「四万十川」流域(当時の中村市、現 四万十市)に行こう！と、かなり軽いノリでの活動であったと思います。

記憶を頼りに、当時の活動の一部しかご紹介できないのが残念ですが、写真は1988-1992年頃のものです。このように「ゆるくて軽い」活動でしたが、映研自体は現在も存続しています。

90年代中頃以降の続編は、また次の機会にOB・OGのどなたかにお願いできることを期待して、筆を擱きたいと思います。

1988年頃

学生支援（競争的資金）活動報告

第２回（2019年）

讃樹會では、学生生活の活性・充実に資することを目的とし、2018年度から学生支援を開始しました。採択は年間５件に限られます。このことにより、将来的な競争的資金獲得の練習の場となることも期待しています。（2020年度募集要項は讃樹會HPを参照下さい。）

オレゴン健康医科大学での家庭医療実習

医学科５年　冨谷　紘加

平成31年３月18日から３月30日までの間、アメリカオレゴン州ポートランドにあるオレゴン健康医科大学（OHSU）で家庭医療を学ぶ実習に参加させていただきました。OHSUでは特に家庭医の教育プログラムが有名です。

二週間の実習の中で外来のクリニックで先生にshadowさせてもらう機会が一番多くありました。文化の違いも理由の一つではあるかもしれませんが、家庭医がとても楽しそうに働いているというのが一番強い印象でした。患者と医師の会話はジョークを交え、お互いの家族の話をするなど友人や親戚のようにも見えました。しかし病気のこととなると医師は患者の話を傾聴し、時に患者が涙し最後に抱擁を交わす場面もありました。どの先生も私の質問にも真摯かつフレンドリーに答えてくださり、教育者としても素晴らしいと感じました。

大学病院と外来を結ぶスカイトラム

OHSUの病棟の実習では外来よりも会話のスピードが速く内容も密だったので、専門用語を聞き取るのに必死でした。雰囲気は大学病院と通ずるところもありましたが、病棟の家庭医は非常に幅広い疾患を受け持っていました。家庭医というと受け持ち患者と大きな病院との仲介をするという印象があったのですが、ここでは新生児や周産期、心疾患から糖尿病などの慢性疾患、精神疾患まで病棟で家庭医チームが回診しており、それぞれの専門医と連携をとり治療体制を整えていました。家庭医という分野も専門のひとつなのだと感じました。

家庭医は皆コミュニケーションのエキスパートで、30分の診察の間に医師と患者の厚い信頼関係がうかがえました。またアメリカではかかりつけ医の制度が確

立されており、一人の家庭医が1000人ほどの市民を担当として受け持っているそうです。日本でもかかりつけ医の制度は導入されつつありますがここまではっきりと担当が決まっているわけではありません。保険の制度も日本とアメリカでは大きく異なり、国民皆保険制度がないアメリカでは日本ほど頻繁に病院に来る人は少ないそうです。

コーディネーターのベンさん宅にてホームパーティー

今回の実習参加にあたって相談に乗っていただいた国際交流委員長の和田先生、また讃樹會のご支援に心より感謝申し上げます。この実習は地域医療振興協会のプログラムへ応募し、東京での面接を通して参加が決定しました。家庭医療に興味がある全国の医学生に人気のプログラムとなっていますが、香川大学からの参加は非常に少ないです。今後は留学経験を後輩に伝え、留学に興味のある学生を後押しできるよう努めたいと考えております。

IFMSAK-Exchange Support Club（ESC）活動報告
留学生の派遣と受け入れ

医学科５年　パラマ　ジョン　賢一

今年2019年もIFMSAK-ESCにとっては充実した一年でした。IFMSAKはInternational Federation of Medical Students' Associations Kagawaの略であり、世界規模で活躍しているIFMSA（国際医学生連盟）の香川大学局です。その中でIFMSAの留学制度に関わっているのはESCです。IFMSAの活動に関わっていた香大生は前から多かったのですが、IFMSAKの形として統合したのは二年前でした。

今年は一つとても大きな報告があります。７月に初めてIFMSAを通して留学生を受け入れることができました。一ヵ月ほどエジプトからの留学生があかつき荘に滞在し、薬理学の研究室に通いました。休日に香大生と一緒に観光に行ったり、食事会をしたり香川大学の最大のおもてなしをすることを心がけました。彼自身も自分で県外への旅行を計画し、充実した留学を経験できたと言っていました。初めての受け入れで大変でしたが、なかなか交流が無い国の方と話し合えて、お互いにとってとても有意義な交流でした。

香川大学からの留学生の派遣もまだ続いています。今年一人がスロベニアに行き、来年の志願者も二人います。香大生を海外へ送り出し始めたのはたった２年前でしたが、もう既に留学生５人も派遣していることを誇りに思っています。留学の経験者もそこでさらに海外への興味を深め、全員が別の留学プログラムに関心を持ち、それに向けて毎週医学英語の勉強会を開いています。

今後も活動を広げようと考えています。現在、一つの研究室の協力を得ていますが、さらに受け入れる研究室を増やすと受け入れる学生も増加し、香大生の交流できる機会を増やすことも期待できます。また、今は研究留学しかできない状態でありますが、IFMSA

今年エジプトから来日した留学生、エルゲンディーさん

は臨床経験を目的にする留学も実施しています。私はIFMSAKの次の世代がどのようにチャレンジをするか、楽しみにしています。

勿論、学生だけの力ではこのようなプログラムは成り立ちません。香川大学の先生方、職員の方々のサポートも不可欠でありました。西山先生と薬理学の研究室が日頃から外国からの学生を歓迎していますが、我々の依頼にも応えて下さり大変感謝しています。和田先生や国際交流委員会と学務室の方々は常に全面的に協力してくださっています。そして讃樹會の支援も大変助かりました―ヨーロッパ等にも行けるこのような大規模なプログラムに参加するにはどうしても学生の経済的な負担が大きいため、その負担を軽減することで学生の視野も広がっています。心から感謝しています。

▲IFMSAK-ESCの部員がエルゲンディーさんの歓迎会を開催しました

IFMSAK：International Federation of Medical Students Associations – Kagawa 国際医学生連盟–香川
（IFMSAは国際レベルの組織名でIFMSAKは香川大学での一部になります）

香川大学学生ACLS勉強会

代表　医学科３年　**鶴田　詩織**

香川大学学生ACLS勉強会は、「大切な人が目の前で倒れてしまったとき、あなたにはいったい何ができますか？」をテーマに、心停止になった人に遭遇した時に、迅速に適切な救命措置を行えるよう、知識や技術を学んでいます。また、自分たちの知識や技術だけではなく、地域の方やほかの医学系学生に対して講習会を開くなど、誰にでもできる一時救命措置を伝える活動も行っています。

第25回ICLS講習会

●第25回ICLS講習会開催

2019年７月に学内にて、医学部学生を対象とした第25回ICLS講習会を開催しました。今回も１年生から高学年は４年生までの本学医学部生とともに、香川県立保健医療大学看護学科の学生２名が受講してくださいました。学生ACLS勉強会メンバーがインストラクターとして、一時救命措置や、気管挿管やモニター付き除細動器、心停止のアルゴリズムなど院内での二次救命措置についても受講生に体験してもらいました。入学して数か月の新入生も積極的に練習していて、医学に興味を持つとともに知識をつけてもらえたらと願っております。

●医学部医学科オープンキャンパス

2019年８月、オープンキャンパス2019（医学部医学科）にて、約80名の医学部志望の方々を対象とする体験会を開催しました。気管挿管の手技を簡単に説明した後、実際にモデル人形を使って気管挿管の体験をしてもらいました。やはりはじめのうちはうまくいかない方も多かったのですが、説明を繰り返しインストラクターの学生ACLS勉強会メンバーとともに挑戦するうちにほとんどの方が成功し、医学を感じる機会に

なったかと思います。

●BLS講習会開催

第40回香川大学医学部祭、徳島文理大学2019香川キャンパス大学祭「杏樹祭」、香川保健医療大学第20回大学祭「橄欖祭」（すべて2019年10月）にて、学生や一般のお客さんに対し、BLS講習会を開催しました。この講習会で新入部員のBLSを教える技術や話し方も格段に向上し、お客さんだけでなく私たちにとっても非常に実りのある講習会になりました。これからも、医学生だけでなく地域の方々とも講習会を通して交流し、地域における医療活動や健康づくりに貢献していきたいと考えております。

ほかにも、自分たちで手技や知識をつけるために勉強会、体験会を開いたり、他部活（本年度は三俣診療班）に対してBLS講習会を行ったりしています。また、今年は有志によるチームで第５回CPR選手権にも出場し、見事中四国大会優勝、全国大会出場を果たすことができました。また来年度以降もチームを結成して全国を目指し、さらなる知識と技術の発展を目指していきたいと思います。その他、資格としてAHA BLS ProviderやAHA ACLS Providerを取得している学生もいます。資格獲得もひとつの目標として掲げていますので、今後もそのレベルを目指して練習していきます。

最後になりましたが、日頃の讃樹會のご支援、並びにご指導いただいております救急救命センター長の黒田泰弘先生、循環器内科の濱谷英幸先生、香川大学院医学系研究科の永渕克弥先生、さらにはスキルスラボでお世話になっております地域医療教育支援センターの皆様方に深く感謝申し上げます。

保健医療大学におけるBLS講習会

学生ACLS勉強会メンバー一同

支部会・懇親会

87会主催
金西賢治先生教授就任記念祝賀会

香川大学医学部脳神経外科
三宅　啓介
（平成５年卒・８期生）

令和元年８月17日（土）、金西賢治先生香川大学医学部周産期学婦人科学教授就任記念祝賀会を友廣敦文先生、川西正彦先生そして私（三宅）が企画し、高松市ALICE IN TAKAMATSUにて開催しましたので、ご報告申し上げます。

まず、87会とは、1987年４月に香川医科大学に入学し、1993年３月に卒業した同級生の集まりであり、入学年度や卒業年度が異なっても、少なくとも１年、医学の勉強を一緒に行ったメンバーで構成しています。

87会からは、これまで西山　成先生（香川大学医学部薬理学教授）と萩池昌信先生（香川大学危機管理先端教育研究センター 特命教授）の２人が教授として活躍されており、金西先生は３番目の教授として我ら87会から誕生しました。金西先生は同期の学年代表でもあり、また、入学当初から変わらない人柄の良さもあり、当日は46（＋１）名の先生に参加していただきました。87会のメンバーは113名であり、113名に平成31年４月下旬に祝賀会の案内を発送しましたところ、５月の連休明けには72名の先生方よりFaxやメールにて参加の有無の返事をいただきました。Faxやメールは私が所属している脳神経外科の医局に届けていただいたのですが、一人ひとりのお祝いのメッセージが本当に感動する内容でした。そのため、当日は思い出になるすばらしい会に、そして思い出になる会場とおいしい食事とお酒でわいわい盛り上がる会にしようと企画し、ALICE IN TAKAMATSUで開催させていただきました。

金西賢治先生

当日は前日の台風とは打って変わり、快晴のALICE IN TAKAMATSUから見渡せる瀬戸の海は和やかであり、刻々と変化する夕日による金色の瀬戸内の海は、金西先生の晴れ舞台にふさわしい景色でした。

祝賀会は私が司会進行を務め、会の開催に先立ち３年前に他界された川口洋治先生のご冥福をお祈りし、黙祷を捧げました。この会の発起人の１人でもあるタウンクリニック高松東の院長　友廣敦文先生より会のはじまりの挨拶と乾杯の挨拶の後、祝宴となりました。卒業後、26年ぶりに再会する先生も多く、賑やかに会話も弾む中、出席していただいた46人の先生全員より金西先生教授就任のお祝いの挨拶と近況報告をしていただきました。皆さん、病院長、開業の院長あるいは部長などそれぞれ専門領域の中心として活躍され、話題が尽きることはありませんでした。

中締めとして有志の先生より花束と記念品の贈呈の後、金西先生から謝辞がありました。気になる記念品かと思いますが、私が選択させていただきました。そ

の記念品は、大塚国際美術館で展示されているゴッホのひまわり　７作品です。大塚国際美術館に展示されている名画は実物の絵画ではなく、陶板画で再現された絵画です。しかし、絵画の多くは油絵であり、時間とともに色あせてきます。したがって、時間とともに修復が必要となり、ある意味で本来の色ではないこともあります。しかし、陶板は実物の絵画の色をそのまま2000年以上も保存し続けることが可能であるといわれています。つまり、ひまわりのいつも太陽に向かってすくすくと伸び、花を天に咲かし、その色は陶板で色あせしない、そのような香川大学医学部周産期学婦人科学を目指していただきたく贈らせていただきました。

ALICE IN TAKAMATSUでの祝賀会は午後９時に終了となり、会場を“First spot 一会　ひとえ”に移動し、その後は、３次会、４次会へと（主賓はおりませんが）盛大に続きました。

最後に祝賀会に参加していただきました先生方、当日は都合により参加できなかった先生もお返事をいただき、盛大な会を開催することができましたことをこの場を借りてお礼申しあげますとともに、金西先生の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

松田陽子先生と辻哲平先生の教授就任祝賀会のご報告

同窓会13期生学年理事
香川大学医学部呼吸器内科
金地　伸拓（平成10年卒・13期生）

拝啓

晩冬の候、皆様方には益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、令和元年４月に、香川医科大学医学部13期生である松田陽子先生が香川大学医学部腫瘍病理学講座の教授にご就任されました。また、辻哲平先生が循環器・腎臓疾患地域医療学講座の教授にご就任されました。松田先生は膵癌等の腫瘍病理学的研究、辻先生は末梢血管におけるカテーテルインターベンション等の分野で医学・医療に大きく貢献してこられました。改めておめでとうございます。

お二人のご活躍を祈念して、令和元年９月７日に13期生で教授就任祝賀会を開催しました。開催に際しては岡内正信先生と石川かおり先生を中心に何かとご準備をいただきました。祝賀会にはお二人を含めて41人が参加しました。同期の教授就任はお二人が初めてであり卒業後に皆で会う機会はこれまでありませんでした。卒業後約20年が経過していることもあり、同窓会のように感じられました。

開始前は顔を見て誰かわかるかな、と内心不安でしたが、実際は、皆ほとんど変わっておらず、むしろそれに驚きました。話すにつれ、20年の年月は急速に縮まり、ほんの２、３年前に卒業したかのように思えたくらいです。実際には、ある人は開業していたり、ある人は病院長に就任していたりするなど、皆専門家としてそれぞれの道を歩んでおります。アルコールを片手に、当然ながら懐かしい顔ぶれとの会話ははずみ、JRホテルクレメント高松での２時間は一瞬で過ぎ去りました。２次会は、辻先生が即座に段取りしてくれた店で盛り上がりました。このあたり、辻先生ご夫妻の対応力と行動力に驚かされます。学生時代に通った飲食店の話から勤務先の悪口（？）、家族や子供達の話、少し医学・医療の話などでまた一瞬で時が流れ、気が付けば日付が変わっておりました。何人かはさらに３次会に向かったみたいです。同期の皆様、また集まる機会があれば、ぜひ皆で集まりましょう。

松田先生、辻先生、今後のさらなるご活躍をお祈り致します。最後になりましたが、お忙しい中、この祝賀会の案内作成などをご準備いただいた讃樹會の柚山様に深謝いたします。

敬具

植松（織部）亜弥子、松田（細谷）陽子、横田恭子

上段　金地伸拓、辻哲平、石川（四宮）かおり
下段　岡内正信、真鍋健史、日高（水元）淑恵

【上段】　室田将之、足立俊典、戸谷誠二、山本剛、松下公紀、牛山貴文、高橋欣吾、宇都宮利史、出口貴司、青山徹、安村恒央、山下資樹、澤田真也、井口裕樹、朝倉浩文、岡本佳樹

【中段】　嶋田貴子、宮島美穂、出口（吉田）聡美、稲葉（坂東）純子、山田（百崎）香織、高橋（三宅）淳子、木田（細見）尚子、赤津（細川）友佳子、室田（和田）真希子、植松（織部）亜弥子、福原（青瀧）理恵子、古泉真理、日高（水元）淑惠、中村（四宮）あや

【下段】　石川（四宮）かおり、岡内正信、横田恭子、松田（細谷）陽子、辻哲平、辻（佐生）泰美、真鍋健史、鎌田英紀、金地伸拓

（写真撮影前に退席）藤本壮之

英国ニューキャッスルからSchmid先生をお招きして

香川大学医学部衛生学
鈴木　裕美（平成22年卒・25期生）

Matthias Schmid先生は、英国のニューキャッスル大学附属病院で感染症専門医として活躍しておられる一方、留学生のコーディネーターを務めておられます。ニューキャッスル大学附属病院では、これまで17年間にわたり香川大学医学部から毎年３～５人受け入れ、Schmid先生には10年以上医学生のお世話をしていただいております。今回、2009年度以降の留学生18名が集まって、先生と奥様の来日を歓迎しました。

10月５日㈯16時に香川大学幸町キャンパスで集合し、開始前にSchmid先生と雑談していると、2009年４月に私とマシマ君、カワクボ君が先生のお宅を訪ね、天婦羅やうどん、カレーライスなどを作った話が出ました。その時、天婦羅を食べた奥様が腹痛で２階に引き上げてしまい、カレーをつくった鍋を焦がしてしまって、鍋を台無しにした話、なぜかカワクボ君が台所を破壊したことになっていて、そのせいで引っ越しまでしたんだと大笑いしました！

ああ、こんなこともあった、そんなこともあったと思い出話は尽きませんでしたが、歓迎会はまず留学経験のある卒業生から自己紹介と今の仕事、これから留学する学生へのメッセージなどを含めた短いスピーチで開始しました。件のカワクボ君が留学時代の思い出として、「やりたいことは自分で積極的にアプローチすることで実現する」としてヘリコプターで心臓移植の心臓輸送に同行した話をしてくれました。すると、Schmid先生が「実習中に退屈だと文句を言ってくる学生がいた。そしたら、ヘリコプターに乗って心臓輸送をするという、イギリス人学生もしたことのないような前代未聞の実習をやりとげたヤツがいる！」とカワクボ君の積極性を笑いながらも絶賛しました。他の学生のスピーチにも楽しそうに頷きながら聞き入り、コメントしたり、フォローしてくれたり、先生の気さくで優しく、前向きな言葉に参加者一同励まされました。

Schmid講演

徳田先生＋Schmid

自己紹介の後は、Schmid先生から“Newcastle – a worthwhile elective destination”と題した講演が行われました。たくさんの写真を用いて、Newcastleの魅力や実習内容をお話しいただき、その中でも留学の意義として“I think your elective in Newcastle is a life changing event and will give you skills for the rest of your life”と言われたことは印象的でした。失敗することはあるけれど、恐れずにチャレンジする精神は、何よりも重要だと留学経験を通して学んだことでした。自分も見学するだけでは物足りず、かねてから興味のあった児童虐待の多職種カンファレンスに参加させていただいたり、子ども用のホスピスに宿泊までして見学し、担当者にインタビューしたことなどを思い出しました。「失敗を恐れず積

歓迎会

極的にチャレンジする。」Newcastleでの留学の意義だったと改めて思い出しました。

講演の後は、キャンパス内で立食パーティが行われました。これには徳田副学長ご夫妻、Schmid先生の奥様Jackieや、英国留学に興味を持つ医学科生も参加し、総勢40名以上で楽しい時間を過ごしました。小学生だった三男が今や先生を超すくらい大きくなって、医師を目指す高校生であることや、Jackieが退職してボランティア活動をしていること、先生ももうすぐ退職するといった話を聞くと、時が経ったんだなあと改めて感慨深く思うのでした。また、同期と近況報告をし合ったり、留学を希望する学生と話すことができ、とても有意義な時間でした。

今回の懇親会を開催するにあたり、助成金を下さった讃樹會様、医学部ご在職時代に多くの香川大学医学部生を英国に送り出していただいた徳田先生、企画をしてくださった和田先生、何より10年以上も香川大学の医学生のために尽力し、遠方遥々来て下さったSchmid先生ご夫妻に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

カワクボ君プレゼン

Schmid with sake

第２回岡山讃樹會開催報告

2019年10月6日（日）　場所：メルパルク岡山

令和元年も香川医科大学（香川大学）医学部医学科の同窓会「岡山讃樹會」を開催いたしましたので、ここにご報告させていただきます。昨年度に引き続き35名の先生に御参加いただきまして、たいへん盛況な会となりました。

すぎはら眼科・循環器内科
杉原　雄策（平成17年卒・20期生）

この会の発端は、岡村一心堂病院　岡村暢大先生が2017年４月に岡山に帰ってこられた時に遡ります。香川医科大学、現在は香川大学医学部医学科とゆかりがあり、岡山県、およびその近辺で御活躍をされている先生との交流会を立ち上げられ、「岡山讃樹會」として始まりました。2018年10月に第１回目が開催され、多くの先生に参加して頂き、たいへん盛況で、学生時代を懐かしみながら、専門科、施設を超えての有意義な時間となりました。第１回目の成功を受け今後も継続していきたいとの参加者の意見も多く、今回第２回目岡山讃樹會を開催することとなりました。

開会の御挨拶は元香川医科大学精神科神経科初代教授で、第３代病院長も務められ、現在は、香川大学名誉教授の細川清先生にしていただきました。その後乾杯の御挨拶を香川大学第一生理学助教授であって、現在は岡山大学名誉教授の松井秀樹先生にして頂きました。松井先生は開始時間にかろうじて間に合うハプニングもありつつ、たいへん盛り上がる乾杯宣言をして頂きました。その後美味しい食事とお酒での歓談を挟み、元香川医科大学生物学教授で現在は香川大学名誉教授の板野俊文先生に「香川医科大学と私と医学史」というタイトルで御講演を頂きました。香川医科大学の創世時代から幕末の蘭学者に関するたいへん多岐に渡る含蓄のある御講演となりました。昨今、スライドを使ってのプレゼンテーションが主流であるなか、板野先生はマイク１本で御講演なさいました。講演とは、口頭での言葉こそが主役であることを再確認する素晴らしい名講演となりました。その後、フリーコメントタイムでは、香川大学名誉教授の西岡幹夫先生が執筆されました単行本「讃岐の医学と蘭学」を御紹介されました。（10月10日現在でもAmazonにて発売中です）、次に、第１期生武田繁雄先生から近況の御報告と會発足までの経緯などをお話し頂きました。その後、第25期生小林伸也先生から卒業証書に関する思い出や近況、今後の目標などのお話を頂きました。歓談の時間には、会場全体の色々なところで話の輪が出来ており、皆一様に、昔話に花を咲かせ楽しんでいただけたように思います。最後に、閉会の御挨拶は、代表発起人である第17期生岡村暢大先生がされました。会を催すことになった経緯と来年も開催することを一同と確認し御開きとなりました。司会は前回に引き続き、私、第20期生杉原雄策が担当いたしました。今回、第２回岡山讃樹會開催にあたり多くの方の協力がありました。発起人として、鍛本真一郎先生（１期）･武田繁雄先生（１期）・蓮井光一先生（２期）・竹馬彰先生（３期）・宮本修先生（４期）･岡田浩先生（５期）･枝園忠彦先生（14期）・髙吉理子先生（16期）・岡村暢大先生（17期）・杉原雄策（20期）、讃樹會の柚山様、ご参加いただきました先生方、事務などを一手に引き受けて頂きました岡村一心堂病院秘書三宅様、他ご協力いただいた方々に厚く御礼を申し上げます。

なお、来年も岡山駅近辺での開催を予定しています。今回、卒業生で岡山に由縁のある方で連絡先が判明した範囲の先生方にお声掛けさせていただきましたが、叶わなかった先生方もおられるかと思います。岡山が実家、高校だけ岡山だった、岡山に就職したい、などなど、皆様ぜひご参加いただけますようお願いいたします。岡山讃樹會のメーリングリストも立ち上げておりますので、ご希望の先生がおられましたら岡村暢大先生（okamuu@mac.com）までお声掛けいただけますようお願いいたします。

細川清先生の開会御挨拶

松井秀樹先生乾杯の挨拶

板野俊文先生の御講演

左から宮本修先生、前列　細川清先生、西岡幹夫先生、
後列　樋本尚志先生、板野俊文先生、鍛本真一郎先生、
岡田浩先生

左から前列　武田繁雄先生、大本堯史先生、松井秀樹先生、
後列　足立俊典先生、菅田吉昭先生、蓮井光一先生、
守屋有二先生、田端りか先生、竹馬彰先生

左から前列　末永武寛先生、伊藤真帆先生、
後列　伊勢真人先生、佐々木佳子先生、
髙吉理子先生、安井陽子先生、藤原大輔先生、
川本昌平先生

左から前列　森實典子先生、亀山有香先生、杉原雄策先生、
後列　枝園忠彦先生、岡村暢大先生、小林伸也先生、
横山聖太先生、渡邉伸一郎先生

第一列　宮本（４期）、武田（１期）、大本（元教員）、西岡（元教員）、細川（元教員）、板野（元教員）、岡村（17期）、杉原（20期）
第二列　樋本（５期）、竹馬（３期）、田端（６期）、足立（13期）、森實（13期）、秋山（６期）、鍛本（１期）
第三列　蓮井（２期）、安井（19期）、渡邉（18期）、守屋（２期）、菅田（12期）、岡田（５期）
第四列　枝園（第14期）、髙間（８期）、佐々木（17期）、伊藤（14期）、末永（21期）、小林（25期）、横山（26期）
第五列　川本（26期）、藤原（14期）、伊勢（28期）、大河（17期）、高吉（16期）

1995年入学生　同窓会を開催しました

幹事代表
玉藻クリニック
泉川（藤本）美晴（平成13年卒・16期生）

令和元年12月21日、1995年入学生の同窓会を高松リーガホテルゼストで開催しました。

１次会２次会を合わせて、北は北海道から南は佐賀県より総勢37名が出席し、久しぶりに旧交を温めることができました。また、参加はかなわずとも、多くの方より近況をお知らせいただきました。

さて、私たちが入学した1995年（平成７年）といえば、１月に阪神淡路大震災が発生し、３月に地下鉄サリン事件が世の中を震撼させ、平成の重大事件が立て続けに起きた年でした。不安に包まれた状況の中、希望に胸を弾ませながら、個性溢れる95名の仲間達と香川医科大学（現香川大学医学部医学科）に入学したあの日から、早や四半世紀が経ち、平成から令和に時代が変わりました。そんな長い月日を忘れるほど大いに盛り上がった同窓会の様子を、一部ご報告いたします。なお、主観が入らぬよう幹事団から意見を集めて取り纏めさせていただきました。

まずはルックス編から。お世辞抜きで、女性陣は全く変わりなく、むしろ、ますます美しさに磨きがかかっていました（笑）。一方、男性陣は様々で、最年長のMさんは、学生当時から既に薄くなりかけていた頭頂部が、今や黒々して若返っていました。赤チョッキがトレードマークだったH君は、この同窓会のために再び赤チョッキを準備して出席してくれました。フェンシング界のアイドルだったT君は、貫禄のある風貌に様変わりしていましたが、爽やかなスマイルは健在でした。

次にキャリアアップ編です。子育てと仕事の両立を実現するべく、職場と交渉して働き方改革を実践している人。皮膚科を開業し、現在は同窓生の家族にも信頼される名医になっている人。本邦の先陣を切って『経口的ロボット支援手術TORS』に取り組み、大活躍して有名人になっている人、等々。全てを紹介しきれませんが、仲間の活躍はとても嬉しく、励みになりました。

続きましてワークライフバランス編。家族旅行を兼ねてお子様連れで参加してくれた人。反抗期のご子息が壁に穴を開けた苦労話を面白おかしく披露してくれた人。往復３時間の通勤を頑張っている人。その他、家庭と仕事を両立しながらの働き方はまさに十人十色で、それぞれの工夫や努力を知ることができて、大変、参考になりました。

最後に、人生編・サプライズ編とでも申しましょうか。転科してステップアップする人。医師にはならずに全く別の分野で活躍している人。バツイチをカミングアウトした人、等々。同じ釜の飯を食べた仲間ですが、卒業後はそれぞれの人生を歩んでいるんだということを実感しました。そして、年齢を重ねて違った人生を歩んでいても、あの頃と変わりなく話し合える仲間であることも、同時に実感したひと時でした。カミ

ングアウトといえば、冒頭のルックス編で登場したMさんは、実は、外国人女性と結婚してアンチエイジングのために植毛したんだそうです。

兎にも角にも、大いに笑い、語り、飲んで楽しい時間を過ごしました。１次会では近況報告会、２次会では赤チョッキのH君のミニライブ、３次会でじっくり語り、締めうどんの４次会まで、同窓会は盛会裏に終わり、次回の再会・開催を楽しみに解散しました。

最後に、ご出席いただきました皆様、幹事団の皆様、ご協力いただきました讃樹會の方々に、心より感謝申し上げます。

向かって左から　敬称・旧姓略

４列目　竹林隆介、西庄佐恵、佐野貴範、山中隆夫、立石健祐、岸野毅日人、岡添　誉、渡部秀樹

３列目　吉村恵利子、藤川　愛、大河裕子、冨田明美、櫻田理佳、牧野耕輪、中野　淳、中村　修、岡部悠吾

２列目　森本みずき、丸山康世、伊藤智美、朝倉弘郁、三木眞由美、高吉理子、横井郁美、林　省吾、高橋真由美、田岡利宜也

１列目　山口郁子、岡本尚子、泉川美晴、横田　愛、森　照茂、湧田暁子、長谷川美紀、江原瑞枝、弓場智子

第18回讃樹會関東支部会

追悼　伊藤理先生

川口市立医療センター
古市　　眞（平成元年卒・４期生）

令和元年11月24日に讃樹會関東支部会が開催されました。関東支部長の伊藤理先生ご夫妻のご紹介で毎年横浜のホテルニューグランドで行われています。６期生の内山先生の司会で始まりました。アトラクションで村松明子先生がご自身のマリンバ（かなり大きな木琴です）を遠方より運送されて素敵な演奏と歌が披露され、会を盛り上げていただきました。和やかな雰囲気の中で皆様に近況報告をいただきました。趣味やスポーツ、マラソンをしている先生もいらして、刺激を受けて何か新しいことを始めたくなります。昭和61年に１期生が卒業してから34期になり皆さんそれぞれの道を進んでいます。２年前に司会で会を盛り上げてくれた３期生の清元先生はいまや姫路市長（！）になっており祝電をいただきました。同窓の縁でしょうか、厚生労働省にいらした１期生の北窓先生は姫路市の医監に異動されています。同じ下宿に住んでいた丸山先生は放射線科医としてCT肺がん検診の講演会をするように出世していました。学生時分はこだわりのコーヒーありがとう。いまや全国各地で皆さまがご活躍されているのをお聞きして卒業生として誇らしく感じました。締めとしてみんなで花は咲くや久しぶりの校歌を合唱しました。また１期生の尾島先生スポンサーで２次会も行われました。いつもごちそうになります！

次回は2020年11月29日に行われます。以前にいただいた名簿で私の勤務している病院に同窓生が何人か働いていることを知り、救命センターの小川先生をお誘いしました。当日の朝まで緊急手術をした後で駆けつけてくれました。知らないうちに近くに同窓生がいるかもしれません。皆様お誘いあわせの上で次回の支部会にぜひご参加ください。自分のルーツである香川大学同窓会を盛り上げていただきたいと思います。今年も皆様の益々のご活躍を祈念いたします。

参加者：尾島　博（S61）、内田光一（S62）、木林和彦（S62）、佐々木豊明（S63）、古市　眞（H元）、秋山正史（H３）、内山順造（H３）、杉原　聡（H３）、髙木紀美代（H３）、丸山雄一郎（H３）、入江琢也（H４）、村松明子（H４）、武田早苗（H６）、小西晶子（H６）、伊藤美奈子（H６）、横塚由美（H６）、小川太志（H７）、幾世橋佳（H14）、岩部真人（H15）　（写真位置とは異なります。）

会の数日後に支部長である伊藤理先生の訃報をお聞きしました。長年難病と闘病されているなか、関東支部会を毎年開催していただき車椅子でご参加されていました。心から感謝申し上げるとともにご冥福をお祈り申し上げます。今回お忙しい中で準備していただいた奥様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

第40回香川大学医学部祭を終えて

「わっ！～令月に咲き誇れ讃岐人～」

第40回香川大学医学部祭実行委員長　医学科３年
中野　一輝

第40回香川大学医学部祭が10月11日～13日の３日間にわたって行われました。今年は台風が近づいていて、３日間にわたり、医学部祭を行うことができない危険性がありましたが、どうにか台風がそれ、無事行うことができました。さらに大変多くの方にご来場いただき、大きな事故なく終えることができました。

本年度の医学部祭で私たちが掲げたテーマは「わっ！～令月に咲き誇れ讃岐人～」でした。インパクトのある“わ”という一文字には、地域の“輪”、驚きの“ワッ”、平和の“和”という３つの“わ”を掛けています。今回の医学部祭は、学生だけでなく、医学部祭にお越しいただいた全ての方と大きな輪を作り、沢山のワッという喜ばしい驚きに溢れる、そして讃岐の気候のように穏やかで平和なものにしたいと、願いを込めました。また、新元号“令和”の由来になった、万葉集“梅花の歌”に詠われている、“令月”という言葉を引用し、何をするにも良き月に、香川大学医学部生一人ひとりの様々な創造性が輝き、展示や企画、各サークルによる模擬店等が、学生全員の力によって今まで以上に賑わい活気あふれるものになるように、という思いから本年の医学部祭のサブテーマを掲げました。

みんなでダンス

このテーマを実現するために、様々な取り組みをおこないました。まず、来場していただいた皆様にもステージ企画に参加していただきたいと考え、昨年度も行われました参加型ステージ企画「みんなでダンス」を今年も開催させていただきました。この企画では、三木町の保育園・幼稚園・小学校の園児・児童に、ステージに立ってもらい、簡単なダンスを会場にいる全員で踊りました。ダンス曲には今年一世を風靡したFoorinの「パプリカ」を用いました。ステージ企画はどうしても学生向けのイベントになってしまいがちでしたが、参加型のステージ企画を設けることで、一般来場者の方にもより親近感を持って楽しんでいただけたと思います。ステージに上がってくれた子供たちの笑顔に会場はより一層盛り上がりました。

医学展

また、今年の医療講演では、香川大学医学部内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学教授の村尾孝児先生をお招きして、「生活習慣を改善して糖尿病を改善しよう」というテーマでお話していただきました。我々うどん県民にとって切り離しがたい病気である糖尿病について、関心を深めていただけたと思います。さらに、医学展では昨年同様、香川県東讃保健福祉事業所とコラボレーションし、健康に関するミニゲームなどを行いました。そして昨年に引き続き、徳島文理大学

企画局

委員長局

パンフレット

と連携し展示に絡んだスタンプラリーも実施しました。昨年以上に多くの方々に医学展に足を運んでいただき、医学部の大学祭として地域の方々に医療や健康への理解を深めていただける機会を提供することができたと思います。そのほかにも各部活動が力を合わせてこだわりの味を作り上げる模擬店、軽音楽部･アカペラサークル「S-po」・ダンス部などによる迫力のあるライブや医学部管弦楽団による演奏会、特設ステージで行われる、数々の工夫を凝らした企画等、たくさんのイベントが実施されました。医学部祭を盛り上げてくださった各サークルの皆様、本当にありがとうございました。

さて、今年度は医学科３年生・看護科３年生の有志総勢92名の実行委員で運営を行ってきました。前実行委員長からこの役職を引き継いだときは医学部祭を成功させるという漠然とした目標しかありませんでした。さらに、92名のトップに立って、率いるという経験はこれまでの人生で一度もありませんでした。初めての役職に苦戦しながら、約半年の準備期間でよりよい医学部祭を作ろうと、何度も話し合いを重ねて来ました。そして全員が笑顔になれるような医学部祭を作り上げることができたという自信が今はあります。医学部祭の運営に従事して、人とのつながりが増え、学年の仲間との関係を深めることができました。また様々な面で自信をつけることができ、言葉では言い表せないほどの貴重な経験をさせていただいたと思います。誘ってくださった前実行委員長の郷原さん、そして今回ともに医学部祭を運営してくれた実行委員のみんなには本当に感謝しています。

最後になりましたが、一医学部際としてこれほどまでに大規模な香川大学医学部祭を開催することができましたのは、讃樹會、医師会、香川大学医学部の教職員の皆様、スポンサーの皆様、地域の皆様、そして当日お越しいただいた皆様の、御支援・御協力あってのことと、改めて厚く御礼申し上げます。今後とも御指導・御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

ベリーグッドマンのライブ

実行委員集合写真

編集後記

２月の行事と言えば、節分でしたね。皆さんの各ご家庭では、節分にちなんだこと、何か行われましたでしょうか？節分とは、各季節の始まり（立春、立夏、立秋、立冬）の前日のこととされ、字のとおり「季節を分ける」という意味もあるそうです。旧暦では春から新年が始まっていたため、立春の前日である「節分」は大晦日に相当する大事な日だったそうです。大晦日に新年の目標でダイエットの決意をたててはみたものの、早くも挫折しかけている今、今度子供たちと豆まきをしながら決意を新たにしたいと思います。

この区切りに新たな同窓会誌を編集しております。病院長就任のご挨拶を、脳神経外科学の田宮隆先生よりいただきました。また、讃樹會市民公開講座を辻晃仁先生をお迎えして最新のがんゲノム医療について講演をいただきました。今後も両先生には我々をご指導いただきたく思います。新しい区切りとともに、讃樹會としましても明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。

さて、早速ですが本号ですが女医特集としてハワイで開業された太田先生と香川県内で活躍されている海部先生・関先生・村田先生・加藤先生に寄稿いただきました。女性医師のかたがたからご寄稿頂き、香川大学医学部卒業生が自身の力で多方面に活躍していることを感じさせるものでした。

学生からの報告で、剣道部・ヨット部・陸上部・水泳部の西医体・全医体での目覚ましい活躍を報告してもらいました。支部会・懇親会の報告もさせていただいております。讃樹會会員が増え、このように活動していただき、少しでも香川大学医学部を卒業したことを誇りに思う機会を増やしていただけたらと心より思います。また、讃樹會の書を書かれた、小森秀雲先生の書道教室の寄稿を日下教授に頂きました。小森先生の個人の特性を見つけて伸ばす大事な言葉かけの話を興味深く読ませていただきました。ここで、悲しい話題ですが香川大学医学部を支えていただいた田邉前学長、若くして旅立たれた伊藤先生、杉田先生に安らかなご冥福をお祈りします。

私は、今年も、節分で鬼になる予定です。毎年、子供たちは落花生や飴を家の各部屋で、「鬼は外、福は内！」の妻の掛け声のもと私に投げるのが恒例です。小さい頃は、年齢の数以上食べて、それが楽しみでしたが、今は２、３粒しか食べないなぁと振り返りながら、リアルな鬼のお面をネットで探しています。毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様に心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくお願い申し上げます。

広報局長　谷　　丈二（平成14年卒・17期生）

事務局からのお知らせ

【連絡・問合わせ先】
TEL　087－840－2291
Email：dousou@med.kagawa-u.ac.jp

訃　報

名誉会員
　田邉　正忠先生　2019年９月

正会員
　伊藤　　理先生（昭和63年卒・第３期生）
　　2019年11月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

◆総会出欠は、３月末日までに返信ください。
会長選挙・理事選挙の投票は５月７日までにお願いします。

◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。

◆同窓会、懇親会を開催する際には、10人以上集まると一人2000円の支援がありますので是非ご利用下さい。（助成カウント条件は、卒後15年まで且つ会費を納入いただいている正会員です。）

◆国外留学助成金の申込は年２回です。直近の締切は本年３月末日です。次は９月末日となります。

◆研究助成金/研究奨励金の申込締切は５月１日です。ふるってご応募下さい。